

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	東書	書名	新編 新しい社会 歴史
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連			<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、「深めよう」や「歴史にアクセス」が設けられ、関連知識の習得ができるように取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化」に関連して、「深めよう」で「現代につながる室町時代の生活文化（衣食住）」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、「歴史学習のまとめをしよう」などで言語活動により、各時代の特色をとらえられるように取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、「この時代の特色をとらえよう」で時代の特色をまとめられるように構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9～歴史 - 13）に記載。</p>
かながわ教育 ビジョンとの 関連			<p>「思いやる力」の「人権教育」に関連して、アイヌ民族、在日韓国・朝鮮人、女性などへの差別をなくし、平等な社会を築いていくことが取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して、「地域の歴史を調べてみよう」で、調べたことをグループ内で共有したり提案したりする学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかがわる力」の「ボランティア活動」に関連して、「地域の史跡のボランティアガイドをする中学生」が取り上げられている。</p>
内 容			<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「私たち歴史探検隊」が配置され、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>各時代の課題を解決し、人々の願いを実現していった先人の取組が「人物コラム」として取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、章末に博物館や資料館をどのように利用しているかが、写真とともに取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期の「国境の確定」において日本地図を掲載し、脚注に竹島、尖閣諸島を領土に編入したことが示されている。また、見開き2ページで北方領土、竹島、尖閣諸島が取り上げられている。</p> <p>神奈川に関連することとして、新橋・横浜間に初めて鉄道が開通したことや横浜などの外国人居留地から文明開化が広がったことなどが取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14～歴史 - 36）に記載。</p>
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁			<p>判型はA B判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、この教科書は、「全ての生徒の色覚特性に適應するようにデザインしています。」「再生紙・植物油インキを使用しています。」と表記されている。</p> <p>巻頭に「日本の国宝・重要文化財」「日本の世界遺産」、巻末に「歴史の中の植物」「各地の主な史跡」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>
表記・表現			<p>学習を深めるためのキャラクターが使用されている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	教出	書名	中学社会 歴史 未来をひらく
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連			<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、コラムや特設ページが設けられ、歴史のなぞを紐解くことを実感できるように取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化」に関連して、「郷土の歴史を探ろう」で地域の遺跡、古墳、寺社、墓碑を訪ねる地域調査などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、章末の「学習のまとめと表現」で資料をもとに自分なりの言葉で説明する活動が取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、「時代の変化に注目しよう！」で各時代の移り変わりを考察できるように構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9～歴史 - 13）に記載。</p>
かながわ教育 ビジョンとの 関連			<p>「思いやる力」の「人権教育」に関連して、民族や国籍を越えて一人ひとりの人権を尊重していくことの大切さが取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して「時代の変化に注目しよう！」で考えたこと、気が付いたことを話し合ったり、発表し合ったりする学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかかわる力」の「地域貢献活動」に関連して、郷土や地域をテーマにした特集が取り上げられている。</p>
内 容			<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「郷土の歴史を探ろう」が配置され、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>時代の転換期に生きた多様な人物に焦点を当て、社会を築き、動かしてきた先人の営みや、民衆の成長について取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、「さらに情報を集めたいときは」で博物館を取り上げ、訪ねるときにはどうしたらよいかが取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期の「日本の外交と領土の歩み」で地図と年表を掲載し、竹島、尖閣諸島を領土に編入したことが脚注に示されている。また、見開き2ページで北方領土、竹島、尖閣諸島が取り上げられている。</p> <p>神奈川に関連することとして、「移り変わる戦後の街を訪ねて」において、川崎市を事例に、地域調査のまとめや発表方法などが取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14～歴史 - 36）に記載。</p>
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁			<p>判型はA B判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、この教科書は、「再生紙と植物油インキを使用」「印刷においては、バイオマスで発電されたグリーン電力を使用」「カラーユニバーサルデザインに配慮」と表記されている。</p> <p>巻頭に「歴史のなかの言葉」、巻末に「江戸時代の産業と交通」「昔の国と、都道府県の対照図」「世界地図の歴史」「各地の主な遺跡・史跡・できごと」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>
表記・表現			<p>学習を深めるためのキャラクターが使用されている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	清水	書名	中学 歴史 日本の歴史と世界
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連	<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、「もっと知りたい歴史」が設けられ、関連知識の習得ができるように取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化」に関連して、「もっと知りたい歴史」で「神話と伝承」「宮廷の女性と仮名文学」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、「まとめてみよう」や章末にある年表や写真などを用いて各時代を振り返る作業が設けられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、各章の初めにある「ってどんな時代？」で課題を設定し、学習が進められるように構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9～歴史 - 13）に記載。</p>		
かながわ教育 ビジョンとの 関連	<p>「思いやる力」の「人権教育」に関連して、日本の課題として差別問題の解消を取り上げ、男女平等を実現していくことの大切さが取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して、章末の「まとめてみよう」で写真を見てその時代の政治や文化の特色について自分の言葉で説明する学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかがわる力」の「生きる」「ふれあい」に関連して、人・自然との共生をはかる態度の育成をめざして、コラムや特設ページでさまざまな人々の生き方や、自然とのふれあい、関わり方などが取り上げられている。</p>		
内 容	<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「身近な地域を調べよう」が配置され、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>先人たちが、政治・経済・文化活動や技術開発などあらゆる分野で不断の努力を重ねたことでよりよい社会・生活が築かれていったことが取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、「歴史のとびら」では地域の博物館や郷土資料館などの利用法・活用法が取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期の「日本と領土の確定」で日本地図を掲載し、竹島、尖閣諸島を領土に編入したことが示されている。</p> <p>神奈川に関連することとして、「身近な地域を調べよう」において、川崎市の地名資料室などを例に挙げ、フィールドワークの方法などが取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14～歴史 - 36）に記載。</p>		
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁	<p>判型はB5判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、「この教科書は再生紙および一部に環境に配慮したインキを使用」「見やすく読みまちがえしにくいユニバーサルデザインの文字を使用しています。」と表記されている。</p> <p>巻頭に「私たちの住む日本列島」「世界の地図」、巻末に「国と都道府県」「日本の歴史的遺産」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>		
表記・表現	<p>重要な語句は太字のゴシック体で表記されている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>		

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	帝国	書名	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連			<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、各時代の最初に「タイムトラベル」が設けられ、時代の特色が取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化」に関連して、「地域史」で「大仏殿を失った「鎌倉大仏」」「北海道の独自の文化」「各地に広がった文化」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、章末の「学習をふりかえろう」では時代を大観し、表現する活動が取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、「坂本龍馬暗殺のなぞ」では、資料が提示され、自分の意見を作り上げ発表するよう構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9～歴史 - 13）に記載。</p>
かながわ教育 ビジョンとの 関連			<p>「思いやる力」の「人権教育」に関連して、老人や子ども、女性、民族や人種によって差別された人々の人権を保障し、平等な社会を築いていくことの大切さが取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して「各時代の特色を説明しよう」で課題について話し合う学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかがわる力」の「ふれあい」「地域貢献」に関連して、地域を知り、地域を大切にしていける態度の育成を図るために、身近な地域を調べる学習が取り上げられている。</p>
内 容			<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「身近な地域にひそむ歴史を探ろう」が取り上げられ、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>より良い社会の創造に参画する態度を育てるため、過去の様々な人々の日常生活の営みや努力・工夫が取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、巻頭の特集記事で、博物館や資料館が情報を集める方法の1つとして示されている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期の「日本の国境と外交」で地図と年表を掲載し、竹島、尖閣諸島を領土に編入したことが示されている。また、見開き2ページで北方領土、竹島、尖閣諸島が取り上げられている。</p> <p>神奈川に関連することとして、「世界に開かれた港・横浜」において、横浜から新しい文化が各地に広がったことなどが取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14～歴史 - 36）に記載。</p>
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁			<p>判型はA B判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、「この教科書は、環境にやさしい再生紙・ライスインクを使用しています。また、カラーバリアフリーを含むユニバーサルデザインに配慮しています。」と表記されている。</p> <p>巻頭に「日本各地の伝統行事と祭り」、巻末に「歴史の舞台を訪ねよう」「世界と日本を結ぶさきがけとなった人々」「日本地図の歴史」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>
表記・表現			<p>学習を深めるためのキャラクターが使用されている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	日文	書名	中学社会 歴史的分野
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連	<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、「歴史を掘り下げる」「先人に学ぶ」などの特設ページが設けられ、今日的課題の歴史的背景が取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化」に関連して、「先人に学ぶ」で「東大寺の再興と重源 - 再興を支えた中世の人々 - 」「近代社会に日本を見つめ直す - 岡倉天心とフェノロサ - 」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、時代の転換の様子や時代の特色について、考え、判断し、自分の言葉で表現することを促す活動が取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、各編の初めの「地図で見る世界の動き」で、世界史の中での日本の様子が示され、その時代がとらえられるよう構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9 ~ 歴史 - 13）に記載。</p>		
かながわ教育 ビジョンとの 関連	<p>○「思いやる力」の「人権教育」に関連して、平等な社会を築いていくことの大切さが取り上げられている</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して、「とらえよう！時代の転換」で、「読み取ろう 考えよう 伝えよう」という学習の流れが取り上げられている。</p> <p>「社会とかがわる力」の「ふれあい」「地域貢献」に関連して、地域への関心・意欲を高め、地域を大切にす態度の育成を図るために、身近な地域を調べる学習が取り上げられている。</p>		
内 容	<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「でかけよう！地域調べ」が取り上げられ、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>「先人に学ぶ」などの特設ページが設けられ、生活の向上や文化の発展などに取り組んだ先人の姿が取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、「でかけよう！地域調べ」の中で、博物館の見学、活用のしかたが取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期の「外交と国境の確定」で地図を掲載し、竹島、尖閣諸島を領土に編入したことが脚注に示されている。また、コラムで竹島、尖閣諸島が取り上げられている。</p> <p>神奈川に関連することとして、「解体された小田原城天守」の写真を掲載し、その跡地には公園などがつくられたことが取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14 ~ 歴史 - 36）に記載。</p>		
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁	<p>判型はA B判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、「この教科書はカラーユニバーサルデザインに配慮しています。また、植物油インキと再生紙を使用しています。」と表記されている。</p> <p>巻頭に「歴史との出会い」「国県対照と五畿七道」、巻末に「主なできごと・史跡・関係地」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>		
表記・表現	<p>学習を深めるためのキャラクターが使用されている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>		

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	自由社	書名	新版	新しい歴史教科書
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連				<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、各時代にコラムが設けられ、時代の特色が取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化の尊重」に関連して、「コラム もっと知りたい」で「和の文化」縄文」「仮名文学と女流文学」「浮世絵とジャポニスム 世界で花開いた江戸の文化」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、「まとめにチャレンジ」で自分の言葉で表現する活動が取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、章の終わりの「 とはどんな時代か」で、時代をまとめ、課題を設定し、その後で意見交換ができるように構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9～歴史 - 13）に記載。</p>
かながわ教育 ビジョンとの 関連				<p>「思いやる力」の「道徳教育」に関連して、武士の忠義についてや二宮尊徳の勤勉の精神が取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して、各章のまとめの「～とはどんな時代か」で課題に対する意見交換会という学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかがわる力」の「ふれあい」に関連して、「もっと知りたい 勇気と友情の物語 世界と交流した近代日本」でエルトゥールル号事件、台湾にダムを作った八田興一を取り上げ、他国の人との交流・ふれあい、貢献が取り上げられている。</p>
内 容				<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「地域の歴史を調べる」が取り上げられ、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>郷土の先祖がどのように生活し、文化と伝統を作り上げてきたかを学ぶため、郷土の歴史の調べ方について取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、巻頭の「 の歴史を調べる」では、博物館や資料館などの現地にでかけて調べるフィールドワークが取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、「21世紀の日本の進路」で竹島、尖閣諸島を明治期に領土に編入したことが脚注に示されている。</p> <p>神奈川に関連することとして、コラムを設けて「二宮尊徳と勤勉の精神」が取り上げられ、写真資料として神奈川県「地券」や「川崎のコンビナート」が取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14～歴史 - 36）に記載。</p>
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁				<p>判型はB5判で、見開き2ページを1テーマとして構成されている。</p> <p>巻頭に「日本の伝統的工芸品」「旧国名と都道府県名」、巻末に「年号 西暦早見表」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>
表記・表現				<p>学習を深めるためのキャラクターが使用され、重要な語句は太字のゴシック体で表記されている</p> <p>学習内容にかかわることが、コラムに取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	育鵬社	書名	[新編]新しい日本の歴史
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連	<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、「歴史ズームイン」が設けられ、歴史を築いた人物が取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化の尊重」に関連して、「歴史ズームイン」で「日本人の宗教観」「かな文字の発達」「茶の湯と生け花」「浮世絵の影響 - ジャポニスム」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、章末の「学習のまとめ」で各時代の歴史を大観できるように取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、各章の初めにある「鳥の目で見ると」「虫の目で見ると」でその時代をとらえるように構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、見開き2ページごとに、その時間で学習した主な内容を生徒に説明させる課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9 ~ 歴史 - 13）に記載。</p>		
かながわ教育 ビジョンとの 関連	<p>「思いやる力」の「いのちの大切さ」に関連して、杉原千畝と樋口季一郎がユダヤ人の命を救ったこと、トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難に際して村人が献身的に救助したことが取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して、「学習のまとめ」で、この時代はどのような時代であったかをノートに書き、考えたことを話し合う学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかかわる力」の「生きる」「働く」に関連して、「なでしこ日本史」の特集で各時代の女性の生き方が取り上げられている。</p>		
内 容	<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「課題学習」が配置され、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>「献身」「公共」「勇気」「勤勉」などの美德を体得した人物や、国家や人生の岐路に道を切り開いた人物などが取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、課題学習で博物館の活用について取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期の「近隣諸国との国境画定」で地図が掲載されている。また、コラムで北方領土、竹島、尖閣諸島が取り上げられている。神奈川に関連することとして、「人物クローズアップ」というコラムを設けて、「農民自身による農村の復興を指導した二宮尊徳」が取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14 ~ 歴史 - 36）に記載。</p>		
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁	<p>判型はA B判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、「この教科書は、環境に配慮し、植物油インキで印刷しています。また、本文用紙の一部には再生紙を使用しています。」と表記されている。</p> <p>巻頭に「日本の美の形」、巻末に「世界と日本の世界文化遺産」「各地のおもな遺跡・史跡」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>		
表記・表現	<p>学習を深めるためのキャラクターが使用されている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>		

【資料】

教科種目名《社会（歴史的分野）》

発行者の略号	学び舎	書名	ともに学ぶ人間の歴史
教育基本法、 学校教育法 及び 学習指導要領 との関連			<p>教育基本法に示されている「幅広い知識」に関連して、各時代にコラムが設けられ、時代の特色が取り上げられている。</p> <p>教育基本法に示されている「伝統と文化の尊重」に関連して、コラムで「三内丸山の大規模なムラ」「常陸国風土記」に書かれた富士山と筑波山」「これが極楽浄土だ - 平等院鳳凰堂」などが取り上げられている。</p> <p>学校教育法に示されている「思考力、判断力、表現力」に関連して、章ごとの「ふりかえる」で時代の特色と時代の転換をふりかえる活動が取り上げられている。</p> <p>学習指導要領の社会科の目標に示されている「広い視野」「多面的・多角的に考察」に関連して、各章の初めに世界地図で1つのテーマを表しており、世界とのつながりを意識して、学習が進められるように構成されている。</p> <p>学習指導要領の主な改善事項である「言語活動の充実」に関連して、各章末の学習のまとめでは、歴史の流れをまとめる、資料を説明する、時代の特色を言葉で書く、意見交換する、などの課題が設けられている。</p> <p>*詳細は、資料（歴史 - 9～歴史 - 13）に記載。</p>
かながわ教育 ビジョンとの 関連			<p>○「思いやる力」の「人権教育」に関連して、アメリカにおける黒人や在日韓国人・朝鮮人、ハンセン病患者などへの差別をなくすこと、戦時下や植民地支配下での人権侵害を問い直す動きが進んでいることが取り上げられている。</p> <p>「たくましく生きる力」の「コミュニケーション能力」に関連して、「学習のまとめ」で、時代の特色などについて自分の考えをまとめたり、意見を交換する学習が取り上げられている。</p> <p>「社会とかがわる力」の「生きる」「働く」に関連して、歴史上の人物だけでなく、一般民衆（女性や子どもも含む）の生き方、働き方が取り上げられている。</p>
内 容			<p>身近な地域の歴史を調べる学習では、「地域の博物館で調べる」が配置され、地域の歴史の調べ学習の方法やテーマ例が示されている。</p> <p>歴史上の人物については、指導的な立場の人物のみならず、様々な分野・階層の男女の生活や社会的な業績などが取り上げられている。</p> <p>博物館・郷土資料館などの施設の活用に関連して、地域にある博物館を訪問し、歴史を実感したり、調べたりすることが取り上げられている。</p> <p>領土に関する教育の充実について、明治期に竹島、尖閣諸島を領土に編入したことが脚注に示されている。</p> <p>神奈川に関連することとして、「右目を射られた鎌倉権五郎景政」というコラムや「生麦事件の現場」の写真が取り上げられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 14～歴史 - 36）に記載。</p>
構 成 ・ 分 量 ・ 装 丁			<p>判型はA4判で、見開き2ページを1テーマとして構成されており、「この教科書は、再生紙を使用し（見返しは除く）植物インキで印刷してあります。」「じょうぶで開きのよいPUR製本を採用しています。」と表記されている。</p> <p>巻頭に「歴史地図」、巻末に「歴史地図・昔の国名と国境」「歴史地図・日本」が掲載されている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>
表記・表現			<p>学習内容にかかわることが、コラムに取り上げられている。</p> <p>資料には見開きごとに通し番号が付けられている。</p> <p>*詳細のデータは、資料（歴史 - 37）に記載。</p>

教科種目名《社会（歴史的分野）》

1 教育基本法、学校教育法及び学習指導要領との関連

教育基本法第2条及び第6条第2項の内容

第2条 一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

東書	「深めよう」や「歴史にアクセス」が設けられ、関連知識の習得をできるように取り上げられている。
教出	コラムや特設ページが設けられ、歴史のなぞを紐解くことを実感できるように取り上げられている。
清水	「もっと知りたい歴史」が設けられ、関連知識の習得ができるように取り上げられている。
帝国	各時代の最初に「タイムトラベル」が設けられ、時代の特色が取り上げられている。
日文	「歴史を掘り下げる」「先人に学ぶ」などの特設ページが設けられ、今日的課題の歴史的背景が取り上げられている。
自由社	各時代にコラムが設けられ、時代の特色が取り上げられている。
育鵬社	「歴史ズームイン」が設けられ、歴史を築いた人物が取り上げられている。
学び舎	各時代にコラムが設けられ、時代の特色が取り上げられている。

二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

東書	勤労観についても考えられるように、世界的に活躍している、評価されている日本人が取り上げられている。
教出	各時代像、職業人や個人の生き方などについてとらえることができるように、各時代に生きた多様な人物、エピソードなどが取り上げられている。
清水	よりよい生活・社会をめざして人々が努力を続けてきたことが系統的に取り上げられている。
帝国	各時代の人々がどのように生活し、働いていたかをイラストや資料から考える作業が取り上げられている。各時代の導入部に「タイムトラベル」が設けられ、その時代の人々の生活の姿がイラストで取り上げられている。
日文	先人たちがどのように生活し、働いたかを身近な地域から考えられるように、地域を知ることが取り上げられている。文化継承の仕事の大切さを示すために、九州国立博物館の文化財保存修復の仕事が取り上げられている。
自由社	日本人の創造性について、「日本のモノづくりの先駆者」として「からくり儀右衛門」が取り上げられている。
育鵬社	日本人の生き方、勤労観に大きな影響を与えた人物、技術立国日本の形成における先駆者が取り上げられている。生き方や働き方について考えさせようとして、苦難を乗り越えていった人物が取り上げられている。
学び舎	歴史上の人物だけでなく、一般民衆（女性や子どもも含む）の生き方、働き方が取り上げられている。

三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

東書	「私たち歴史探検隊」のコラムでは地域の歴史を調べることを通して、社会の形成に参画する態度を養うよう取り上げられている。また、「女性コラム」では、それぞれの時代の女性の姿が取り上げられている。
教出	社会とどのようにかかわればよいのか考察する単元を最後に設定し、社会の形成に参画する態度を養うよう取り上げられている。
清水	現代日本の課題を提示し、他者と協力して工夫を重ねることの必要性に気づかせ、社会の形成に参画する態度を養うよう取り上げられている。
帝国	社会を形成するために必要な知識が、「人権」「交流」「平和」のコラムで設けられている。異なる考えを両論併記した資料が取り上げられている。
日文	コラム「中世の女性たち」では当時の女性の生活や社会での役割が設けられている。また、コラム「新しい世の中をめざした人々」では身分制社会から新しい世の中をめざして行動した人々について取り上げられている。
自由社	コラム「迫害されたユダヤ人を助けた日本人」では杉原千畝や樋口季一郎が掲載され、正義と責任に基づく勇気ある行動として取り上げられている。
育鵬社	コラム「人物クローズアップ」で、杉原千畝や樋口季一郎、二宮尊徳、新渡戸稲造が掲載され、社会の形成に参画する態度を養うよう取り上げられている。
学び舎	それぞれの時代の女性の願いや行動が取り上げられ、社会の形成に参画する態度を養うよう取り上げられている。

四 生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと。

東書	江戸時代の生活の在り方が、エコロジー社会の見本として見直されていることが記載されている。
教出	江戸時代に糞尿が肥料として用いられたことを通して、様々な物が再利用された様子が記載されている。
清水	歴史にあらわれた植物を通して、日本人が生活の中で自然を用いてきたことが記載されている。
帝国	江戸時代の新田開発の進展が森林減少問題をおこし、幕府により植林が行われたことが記載されている。
日文	江戸時代の人びとが土砂災害対策や再利用に取り組み、環境へ働きかけていたことが記載されている。
自由社	上水道の整備や資源の再利用を通して、江戸が発達したエコロジー社会だったことが記載されている。
育鵬社	江戸時代のごみを減らす努力や再生・活用が今日のエコロジーと結び付いていることが記載されている。
学び舎	人類が自然に働きかけ、自然をつくりかえてきたことが記載されている。

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

東書	「深めよう」で「現代に受けつがれる神話」「現代につながる室町時代の生活文化（衣食住）」などが取り上げられている。
教出	「郷土の歴史を探ろう」で地域の遺跡、古墳、寺社、墓碑を訪ねる地域調査が取り上げられている。
清水	「もっと知りたい歴史」で、「神話と伝承」「宮廷の女性と仮名文学」などが取り上げられている。
帝国	「地域史」で「大仏殿を失った「鎌倉大仏」」「北海道の独自の文化」「各地に広がった文化」などが取り上げられている。
日文	「先人に学ぶ」で「東大寺の再興と重源 - 再興を支えた中世の人々 - 」、「近代社会に日本を見つめ直す - 岡倉天心とフェノロサ - 」などが取り上げられている。
自由社	「コラム もっと知りたい」で「和の文化」縄文」「仮名文学と女流文学」「浮世絵とジャポニスム世界で花開いた江戸の文化」などが取り上げられている。
育鵬社	「歴史ズームイン」で「日本人の宗教観」「かな文字の発達」「茶の湯と生け花」「浮世絵の影響 - ジャポニスム」などが取り上げられている。
学び舎	「三内丸山の大規模なムラ」「常陸国風土記」に書かれた富士山と筑波山」「これが極楽浄土だ - 平等院鳳凰堂」などが取り上げられている。

第6条 2 前項の学校においては、教育の目標が達成されるよう、教育を受ける者の心身の発達に応じて、体系的な教育が組織的に行われなければならない。この場合において、教育を受ける者が、学校生活を営む上で必要な規律を重んずるとともに、自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行われなければならない。

東書	小・中の学習をスムーズに接続できるようにするために、各時代の学習の最初に、小学校社会科の学習事項や小学校社会科教科書に掲載された資料が取り上げられている。
教出	中学への接続が図られるように、「第1章 歴史の移り変わりを考えよう」において、小学校で学習した歴史上の人物や文化遺産を振り返りながら、時代区分や年表の見方を確かめる作業活動が取り上げられている。
清水	小学校の復習とともに中学校の歴史学習の導入をするため、巻頭において、小学校6年において学習した歴史上の人物やできごとについて、時代ごとの特色をまとめる「Yチャート」作成の学習が取り上げられている。
帝国	小学校での学習内容の復習とともに中学校の歴史学習の導入をするため、「歴史をたどろう」において、小学校で学んだ主な出来事や人物が取り上げられている。
日文	既習事項の確認ができるよう、単元の始まりに小学校で学んだ人物や文化遺産が取り上げられている。
自由社	小学校での学習内容の復習とともに中学校の歴史学習の導入をするため、「人物を通して時代をとらえる」において、小学校で取り上げた人物や出来事、文化遺産などが取り上げられている。
育鵬社	小・中の学習をスムーズに接続できるようにするために、各時代の学習の最初に、小学校社会科の学習事項や小学校社会科教科書に掲載された資料が取り上げられている。
学び舎	「歴史への案内」において、小学校の学習をふりかえる活動が取り上げられている。

学校教育法第46条の内容

第46条 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

東書	「歴史学習のまとめをしよう」などで言語活動により、各時代の特色をとらえられるように取り上げられている。
教出	章末の「学習のまとめと表現」で資料をもとに自分なりの言葉で説明する活動が取り上げられている。
清水	章末に年表や写真などを用いて各時代を振りかえる作業を設け、生徒の言葉で表現させる問いが設けられている。
帝国	「確認しよう」で知識の習得を行い、章末の「学習をふりかえろう」でも時代を大観し、表現させる活動が取り上げられている。
日文	時代の転換の様子や時代の特色について考え判断し、自分の言葉で表現することを促す学習活動が配置され、各時代の特色が取り上げられている。
自由社	「まとめにチャレンジ」で自分の言葉で表現する活動が取り入れられている。
育鵬社	章末の「学習のまとめ」で各時代の歴史を大観できるように取り上げられている。
学び舎	章ごとの「ふりかえる」で時代の特色と時代の転換をふりかえることが取り上げられている。

学習指導要領の教科の目標

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

東書	「この時代の特色をとらえよう」で時代の特色をまとめられるように構成されている。
教出	「時代の変化に注目しよう！」で各時代の移り変わりを考察できるように構成されている。
清水	各章の初めにある「 <input type="text"/> ってどんな時代？」で課題を設定し、学習が進められるように構成されている。
帝国	「坂本龍馬暗殺のなぞ」では、資料が提示され、自分の意見を作り上げ発表する活動が構成されている。
日文	各編の初めの「地図で見る世界の動き」で、世界史の中での日本の様子が示され、その時代をとらえられるよう構成されている。
自由社	章の終わりの「 <input type="text"/> とはどんな時代か」で、時代をまとめ、課題を設定し、その後で意見交換ができるように取り上げられている。
育鵬社	各章の初めにある「鳥の目で見る <input type="text"/> 」「虫の目で見る <input type="text"/> 」でその時代をとらえるように構成されている。
学び舎	各章の初めに世界地図で1つのテーマを表しており、世界とのつながりを意識して、学習が進められるように構成されている。

学習指導要領の教育内容の主な改善事項に関連する内容

言語活動の充実

東書	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容を説明する課題が設けられている。また、各章末に調べ学習について説明するコラムと、時代の特色を様々な方法でまとめるコラムが設けられている。
教出	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容を確認する課題と活用して表現する課題が設けられている。また、各章末に基本的学習内容を確認する課題と自分なりの言葉で説明する課題が設けられている。
清水	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容をまとめたり文章で説明する課題が設けられている。また、各章末の学習のまとめでは言語を用いて説明する課題が設けられている。
帝国	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容を考えて説明する課題が設けられている。また、各章末の学習のまとめでは言語を用いて説明する課題が設けられている。
日文	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容を考えて説明する課題が設けられている。また、各章末の学習のまとめでは調べ考えてまとめ表現する学習の流れが取り上げられている。
自由社	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容を考えてまとめ説明する課題が設けられている。また、各章末の学習のまとめでは言語を用いた課題が設けられている。
育鵬社	見開き2ページごとに、その時間で学習した内容を考えてまとめ説明する課題が設けられている。各章末の学習のまとめでは考えて言語を用いてまとめ話し合う課題が設けられている。
学び舎	各章末の学習のまとめでは、歴史の流れをまとめる、資料を説明する、時代の特色を自分の言葉で書く、意見交換する、といった課題が設けられている。

伝統や文化に関する教育の充実

東書	室町時代の衣食住と現代のつながりが取り上げられている。
教出	地域の遺跡や古墳、寺社や墓碑などが取り上げられている。
清水	明治・大正期の食生活や食文化などが取り上げられている。
帝国	日本各地の伝統行事と祭りなどが取り上げられている。
日文	日本の食生活のルーツや文化財を守り伝える仕事などが取り上げられている。
自由社	一揆と合議の伝統や浮世絵とジャポニズムなどが取り上げられている。
育鵬社	日本人の宗教観や富士山と日本人などが取り上げられている。
学び舎	歌を通して日本人の伝統や文化を伝えることが取り上げられている。

道徳教育の充実

東書	「女性の参画」などにおいて、男女平等の考え方が取り上げられている。
教出	「米沢藩の藩政改革」などにおいて、公共の精神が取り上げられている。
清水	「足尾鉍毒事件」などにおいて、正義と責任などが取り上げられている。
帝国	「差別からの解放」などにおいて、人権の考え方が取り上げられている。
日文	「エルトゥールル号遭難事件」などにおいて、命の尊さ、国際協力について取り上げられている。
自由社	「外の目から見た日本 東日本大震災」などにおいて、公共の精神などが取り上げられている。
育鵬社	「杉原千畝と樋口季一郎」などにおいて、人権について取り上げられている。
学び舎	「いったいどうして人間は「アンネの日記」」などにおいて、人権についての考え方が取り上げられている。

体験活動の充実

東書	「私たち歴史探検隊」において、身近な地域の歴史を調べる学習が取り上げられている。
教出	「郷土の歴史を探ろう」において、身近な地域の歴史を調べる学習が取り上げられている。
清水	「身近な地域を調べよう」において、自分の住む家や学校のある身近な地域の歴史について調査するフィールドワークが取り上げられている。
帝国	「歴史の調べ方 まとめ・発表の仕方」において、テーマを決めて身近な地域について調べ、発表する活動が取り上げられている。
日文	「出かけよう！地域調べ」において、史跡見学や博物館での調べ方などが取り上げられている。
自由社	「地域の歴史を調べる」において、テーマを決めてフィールドワークなどを行いながら調べ学習を行い、発表する活動について取り上げられている。
育鵬社	「課題学習」において、史跡見学や博物館での調べ方などが取り上げられている。
学び舎	「地域の歴史を歩く」において、地域の博物館などで調べる活動について取り上げられている。

2 かながわ教育ビジョンとの関連

[思いやる力] 他者を尊重し、多様性を認め合う、思いやる力を育てる。

(共生、豊かな心、いのちの大切さ、生命の尊厳、人権教育、男女平等教育、道徳教育など)

東書	アイヌ民族、在日韓国・朝鮮人、女性など、社会的弱者への差別をなくし、平等な社会を築いていくことの大切さが取り上げられている。
教出	民族や国籍を越えて一人ひとりの人権を尊重していくことの大切さが取り上げられている。
清水	日本の課題として差別問題の解消を取り上げ、男女平等を実現していくことのたいせつさが取り上げられている。
帝国	老人や子ども、女性、民族や人種によって差別された人々の人権を保障し、平等な社会を築いていくことの大切さが取り上げられている。
日文	平等な社会を築いていくことの大切さが取り上げられている。
自由社	武士の忠義についてや二宮尊徳の勤勉の精神が取り上げられている。
育鵬社	杉原千畝と樋口季一郎がユダヤ人の命を救ったこと、トルコ軍艦エルトゥール号の遭難に際して村人が献身的に救助したことが取り上げられている。
学び舎	アメリカにおける黒人や在日韓国人・朝鮮人、ハンセン病患者などへの差別をなくすこと、戦時下や植民地支配下での人権侵害を問い直す動きが進んでいることが取り上げられている。

[たくましく生きる力] 自立した一人の人間として、社会をたくましく生き抜くことのできる力を育てる。

(公共心、規範意識、責任感、国際化、情報化、食育、健康教育、コミュニケーション能力など)

東書	コミュニケーション能力に関連して、「私たち歴史探検隊 地域の歴史を調べてみよう」の「調査の達人」で、調べたことをグループ内で共有したり提案したりする学習が取り上げられている。
教出	コミュニケーション能力に関連して、「時代の変化に注目しよう!」で考えたこと、気が付いたことを話し合ったり、発表しあったりする学習が取り上げられている。
清水	「コミュニケーション能力」に関連して章末の「まとめてみよう」で写真を見てその時代の政治や文化の特色について自分の言葉で説明する学習が取り上げられている。
帝国	コミュニケーション能力に関連して、「学習をふりかえろう」の各時代の特色を説明しようで課題について話し合う学習が取り上げられている。
日文	コミュニケーション能力に関連して、「とらえよう!時代の転換」で、「読み取ろう 考えよう 伝えよう」という学習の流れが取り上げられている。
自由社	コミュニケーション能力に関連して、各章のまとめの「～とはどんな時代か」で課題に対する意見交換会という学習が取り上げられている。
育鵬社	コミュニケーション能力に関連して、各章のまとめの「学習のまとめ」で、この時代ははどのような時代であったかをノートに書き、考えたことを話し合う学習が取り上げられている。
学び舎	コミュニケーション能力に関連して、「学習のまとめ」で、時代の特色などについて自分の考えをまとめたり意見を交換する学習が取り上げられている。

[社会とかかわる力] 社会とかかわりの中で、自己を成長させ、社会に貢献できる力を育てる。

(生きること、働くことの大切さ、自然や人とのふれあい体験、地域貢献活動、ボランティア活動など)

東書	「私たち歴史探検隊 地域の歴史を調べてみよう 町の歴史から将来を考える」では、「地域の史跡のボランティアガイドをする中学生」が取り上げられている。
教出	郷土や日本の伝統と文化に対する愛着を深められるように、郷土や地域をテーマにした特集が取り上げられている。
清水	人・自然との共生をはかる態度の育成をめざして、コラムや特設ページでさまざまな人々の生き方や、自然とのふれあい、関わり方などが取り上げられている。
帝国	地域を知り、地域を大切にしていこうの態度の育成を図るために、身近な地域を調べる学習が取り上げられている。
日文	地域への関心・意欲を高め、地域を大切にする態度の育成を図るために、身近な地域を調べる学習が取り上げられている。
自由社	「もっと知りたい 勇気と友情の物語 世界と交流した近代日本」でエルトゥール号、台湾にダムを作った八田興一を取り上げ、他国の人との交流・ふれあい、貢献が取り上げられている。
育鵬社	「なでしこ日本史」の特集で各時代の女性の生き方が取り上げられている。
学び舎	歴史上の人物だけでなく、一般民衆(女性や子どもも含む)の生き方、働き方が取り上げられている。

3 内容

身近な地域の歴史を調べる学習方法を取り上げている箇所（数）
 取り上げている人物（人数）
 博物館・郷土資料館などの施設の活用を取り上げている箇所（数）
 神奈川県に関連する記載事項
 北方領土について取り上げている記載事項
 竹島について取り上げている記載事項
 尖閣諸島について取り上げている記載事項
 慰安婦または従軍慰安婦について取り上げている記載事項
 強制連行について取り上げている記載事項
 拉致について取り上げている記載事項
 エネルギー問題について取り上げている記載事項
 震災について取り上げている記載事項

～ については、本文に記載されている文を引用

（図・表・年表等で取り扱われているものも含む）

	調査研究事項	東書	教出	清水	帝国	日文	自由社	育鵬社	学び舎	
	身近な地域の歴史を調べる（数）	7	5	2	1	6	1	6	2	
人物	古代までの日本（人数）	43	44	39	34	36	66	55	43	
	中世の日本（人数）	46	41	35	50	36	37	53	48	
	近世の日本（人数）	74	77	77	57	56	119	128	76	
	近代の日本と世界（人数）	79	97	75	100	77	96	144	55	
	現代の日本と世界（人数）	105	65	33	80	61	123	159	115	
	全時代計	347	324	259	321	266	441	539	337	
	博物館・郷土資料館などの施設の活用を取り上げている箇所	6	5	2	1	8	2	4	1	
神奈川県に関連する記載	関連する資料や記載事項（数）	42	41	43	44	38	40	44	58	
	人物（関連の深い人物）	源 頼朝								
		北条 政子								
		北条 時宗								-
		新田 義貞	-							-
		二宮 尊徳	-		-	-	-			-
		ペリー								
		尾崎 行雄	-		-		-	-		-

取り上げている人物【東書】

古代	中世	近世		近代		現代	
第2章 古代までの 日本	第3章 中世の日本	第4章 近世の日本		第5章 開国と近代日 本の歩み	第6章 二度の世界大 戦と日本	第7章 現代の日本と世界	
アテルイ 阿倍仲麻呂 <small>アレクサンドロス大王</small> イエス 大友皇子 大伴家持 小野妹子 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 空海 孔子 好太王 光明皇后 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 知里幸恵 持統天皇 シャカ 聖徳太子 聖武天皇 推古天皇 菅原道真 清少納言 蘇我入鹿 蘇我馬子 蘇我蝦夷 天武天皇 伴善男 <small>中臣(藤原)鎌足</small> <small>中大兄皇子(天智天皇)</small> 長屋王 ハンムラビ王 卑弥呼 倭王武 藤原道長 藤原頼通 武帝 紫式部 ワカタケル大王 倭の五王	足利尊氏 足利義教 足利義政 足利義満 一遍 今川義元 上杉謙信 運慶 栄西 鴨長明 観阿弥 楠木正成 兼好法師 後白河天皇 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 コマシャイン 島津貴久 白河天皇 親鸞 世阿弥 雪舟 千利休 平将門 武田信玄 チンギス・ハン 道元 日蓮 藤原定家 藤原純友 フビライ・ハン 平清盛 北条時政 北条時宗 北条政子 北条泰時 法然 マルコ・ポーロ 源義家 源義経 源義仲 源頼家 源頼朝 源義朝 毛利元就 李成桂	明智光秀 足利義昭 天草四郎 新井白石 石田三成 市川団十郎 伊東マンショ 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 <small>上杉治憲(鷹山)</small> 歌川広重 大塩平八郎 緒方洪庵 尾形光琳 阿国 織田信長 葛飾北斎 狩野永徳 狩野山楽 カルバン 喜多川歌麿 小林一茶 コロンプス 坂田藤十郎 ザビエル シーボルト 十返舎一九 シャクシャイン 杉田玄白 鈴木春信 千利休 大黒屋光太夫 高野長英 滝沢馬琴 武田勝頼 田沼意次 依屋宗達 近松門左衛門 千々石ミゲル 東洲斎写楽 徳川家斉 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川秀忠 徳川光圀 徳川吉宗 <small>豊臣(羽柴)秀吉</small> 豊臣秀頼 中浦ジュリアン <small>バスコ・ダ・ガマ</small> 原マルチノ 菱川師宣 細川重賢	ポッティチェリ マゼラン 松尾芭蕉 松平定信 間宮林蔵 ミケランジェロ 水野忠邦 三井高利 毛利輝元 本居宣長 森本一房 山田長政 与謝蕪村 ラクスマン 李舜臣 ルター <small>レオナルド・ダ・ビンチ</small> レザノフ 渡辺華山	安重根 井伊直弼 板垣退助 伊藤博文 井上馨 岩倉具視 植木枝盛 内村鑑三 梅屋庄吉 江藤新平 袁世凱 大久保利通 大隈重信 大森房吉 岡倉天心 勝海舟 狩野芳崖 北里柴三郎 木戸孝允 木村栄 黒田清輝 クロムウェル 洪秀全 幸徳秋水 小村寿太郎 近藤勇 西郷隆盛 坂本竜馬 三条実美 志賀潔 渋沢栄一 島崎藤村 尚泰 鈴木梅太郎 ストウ夫人 セシル・ローズ 孫文 高杉晋作 高峰譲吉 高村光雲 滝廉太郎 田中正造 津田梅子 東郷平八郎 徳川家茂 徳川慶喜 中江兆民 長岡半太郎 夏目漱石 ナポレオン ニュートン 野口英世 萩原守衛 八田與一 ハリス	樋口一葉 ビゴー ビスマルク ピョートル1世 フェノロサ 福沢諭吉 二葉亭四迷 ペリー 松方正義 マルクス 宮崎滔天 陸奥宗光 明治天皇 森鷗外 モンテスキュー 山口尚芳 横山大観 与謝野晶子 吉田松陰 リンカン ルイ14世 ルソー ロック ワット	赤崎勇 芥川龍之介 アダムス中佐 天野浩 安藤氏 <small>アンネ・フランク</small> 石井十次 犬養毅 ウィルソン 江崎玲於奈 袁世凱 王貞治 大江健三郎 蠣崎氏 楮山ヒロ子 片寄平蔵 加藤高明 川端康成 河本一郎 ガンディー 岸田劉生 岸信介 黒澤明 黒瀬眞一郎 ケネディー 小泉純一郎 小柴昌俊 コシヤマイン 後藤新平 近衛文麿 小林多喜二 小林誠 ゴルバチョフ 佐々木禎子 佐藤栄作 志賀直哉 司馬遼太郎 下村修 シャクシャイン 蒋介石 昭和天皇 白川英樹 杉原千畝 鈴木章 スターリン 孫文 大鵬 竹久夢二 田中角栄 田中耕一 谷崎潤一郎 チャーチル 張学良 張作霖 寺内正毅	鄧小平 <small>トーマス・エディソン</small> 徳川家康 利根川進 留岡幸助 朝永振一郎 豊臣秀吉 長嶋茂雄 中村修二 南部陽一郎 西田幾多郎 新渡戸稲造 根岸英一 ネルー 野口雨情 野依良治 鳩山一郎 浜口雄幸 浜口梧陵 原敬 <small>ハンス・ビーター・リヒター</small> ヒトラー 平塚らいてう 溥儀 福井謙一 ブッシュ フルシチョフ ペリー 細川護熙 増川敏英 松岡洋右 マッカーサー 松前氏 松本清張 美濃部達吉 宮城道雄 ムソリーニ 毛沢東 柳宗悦 山田耕作 山田少年 山中伸弥 ヤン・レツル 湯川秀樹 吉田茂 吉野作造 リットン ルーズベルト レーニン

取り上げている人物【教出】

古代	中世	近世	近代	現代			
第2章 原始・古代 の日本と世界	第3章 中世の日本 と世界	第4章 近世の日本と世界	第5章 近代の幕開け 第6章 近代の日本と 世界 第7章 二度の世界大 戦と日本	第8章 現代の日本と世界			
阿弭流為 阿倍仲麻呂 イエス <small>大海人皇子(天武天皇)</small> 大友皇子 大伴家持 小野妹子 柿本人麻呂 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 空海 クフ王 玄奘 広開土王 孔子 光明皇后 最澄 嵯峨天皇 坂上田村麻呂 始皇帝 持統天皇 シャカ 聖徳太子 聖武天皇 推古天皇 菅原道真 清少納言 蘇我馬子 <small>中臣(藤原)鎌足</small> <small>中大兄皇子(天智天皇)</small> 長屋王 ハンムラビ王 卑弥呼 藤原道長 藤原頼通 ヘロドトス 法顕 ムハンマド 紫式部 山上憶良 煬帝 ワカタケル大王	足利尊氏 足利義政 足利義満 一遍 今川義元 上杉謙信 運慶 栄西 鴨長明 観阿弥 楠木正成 兼好法師 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 コマシャイン 島津貴久 白河天皇 親鸞 世阿弥 雪舟 平清盛 平将門 武田信玄 チンギス・ハン 道元 日蓮 新田義貞 藤原定家 藤原純友 フビライ・ハン 北条氏康 北条時政 北条時宗 北条政子 北条泰時 法然 マルコ=ポーロ 源義家 源義経 源頼朝 李成桂	青木昆陽 明智光秀 足利義昭 天草四郎 新井白石 安藤昌益 石田三成 出雲の阿国 市川団十郎 伊東マンショ 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 上杉鷹山 歌川広重 大岡忠相 緒方洪庵 尾形光琳 織田信長 葛飾北斎 加藤清正 狩野永徳 狩野山楽 賀茂真淵 ガリレイ カルバン 喜多川歌麿 小西行長 小林一茶 コペルニクス コロンブス 坂田藤十郎 シーボルト 十返舎一九 シャクシャイン 杉田玄白 関孝和 千利休 滝沢馬琴 伊達正宗 田沼意次 俵屋宗達 近松門左衛門 千々石ミゲル 東洲斎写楽 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川秀忠 徳川光圀 徳川吉宗 豊臣秀吉 中浦ジュリアン 中江藤樹	二宮尊徳 野國總管 バスコ=ダ=ガマ 支倉常長 塙保己一 林羅山 原マルチノ バリニャーノ 菱川師宣 平賀源内 平田篤胤 フランシスコ=ザビエル ポツティチェリ 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松平定信 ミケランジェロ 本居宣長 与謝蕪村 李舜臣 ルター レオナルド=ダ=ビンチ	青木周蔵 安重根 井伊直弼 石川啄木 板垣退助 伊藤博文 岩倉具視 内村鑑三 榎本武揚 エリザベス1世 袁世凱 大久保利通 大隈重信 大塩平八郎 大森房吉 大山巖 片山潜 勝海舟 川上音二郎 北里柴三郎 木戸孝允 木村栄 金田一京助 クラーク 黒田清隆 黒田清輝 クロムウェル 洪秀全 幸徳秋水 後藤象二郎 小村寿太郎 コンドル 西郷隆盛 坂本竜馬 三条実美 志賀潔 島崎藤村 尚泰 鈴木梅太郎 セシル・ローズ 孫文 高杉晋作 高野長英 高橋是清 高峰譲吉 高村光雲 滝廉太郎 田中正造 知里幸恵 津田梅子 坪内逍遥 寺島宗則 東郷平八郎	徳川家茂 徳川斉昭 徳川慶喜 ナイティンゲール 長岡半太郎 夏目漱石 ナポレオン 新島襄 野口英世 八田與一 ハリス 樋口一葉 ビゴー ビスマルク フェノロサ 福沢諭吉 二葉亭四迷 ペリー 堀田正睦 正岡子規 松平定信 間宮林蔵 マルクス 水野忠邦 陸奥宗光 ムルドル 明治天皇 モース 森鷗外 モンテスキュー 山内豊信 山川捨松 山口尚芳 横井小楠 横山大観 与謝野晶子 吉田松陰 リンカーン ルイ14世 ルソー ロック ワシントン 渡邊華山 ワット	アイゼンハワー 芥川龍之介 安倍晋三 アンネ・フランク 池田隼人 石橋湛山 犬養毅 岩崎弥太郎 ウィルソン 尾崎行雄 オバマ 桂太郎 嘉納治五郎 川端康成 ガンディー 岸田劉生 金正日 クーベルタン 久保山愛吉 黒澤明 ケネディー 小泉純一郎 後藤新平 近衛文麿 小林多喜二 西園寺公望 斎藤実 佐々木禎子 佐藤栄作 志賀直哉 周恩来 蒋介石 杉原千畝 スターリン 孫文 高橋是清 田中角栄 谷崎潤一郎 チャーチル 張作霖 寺内正毅 西田幾多郎 新渡戸稲造 浜口雄幸 原敬 ヒトラー 平塚らいてう プーチン 溥儀 ブッシュ フルシチョフ 松岡洋右 マッカーサー 美濃部達吉	ムッソリーニ 毛沢東 柳宗悦 柳田国男 山田耕作 山田孝野次郎 山本内閣 湯川秀樹 吉野作造 レーニン ローズベルト

取り上げている人物【清水】

古代	中世	近世		近代		現代
第1章 原始・古代 の日本と世界	第2章 中世の日本 と世界	第3章 近世の日本と世界		第4章 近代化の進む 世界と日本	第5章 二つの世界大 戦と日本	第6章 現代の日本 と世界
相沢忠洋 アウグストゥス 阿倍仲麻呂 イエス 小野妹子 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 <small>清原(藤原)清衡</small> 空海 玄奘 孔子 光明皇后 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 シャカ 聖徳太子 聖武天皇 推古天皇 菅原道真 清少納言 平将門 天武天皇 鳥羽上皇 中臣鎌足 <small>中大兄皇子(天智天皇)</small> ハンムラビ 卑弥呼 藤原彰子 藤原純友 藤原定子 藤原道長 藤原頼通 ムハンマド 紫式部 山上憶良 ワカタケル大王	足利尊氏 足利義尚 足利義政 足利義視 足利義満 一遍 <small>ト部(吉田)兼好</small> 栄西 鴨長明 後白河上皇 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 コマシャイン 西行 白河天皇 親鸞 雪舟 平清盛 チンギス=ハン 道元 日蓮 新田義貞 日野富子 藤原定家 フビライ=ハン 北条時宗 北条政子 北条泰時 法然 マルコ=ポーロ 源実朝 源義経 源義仲 源頼朝 源義朝	青木昆陽 明智光秀 浅野長矩 足利義昭 雨森芳洲 新井白石 安藤昌益 石田梅岩 石田三成 市川団十郎 伊東マンショ 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 上杉謙信 歌川広重 <small>エカチェリーナ2世</small> 尾形光琳 阿国 織田信長 葛飾北斎 狩野永徳 狩野山楽 賀茂真淵 カルバン 喜多川歌麿 木下順庵 吉良義央 契沖 小林一茶 コロンプス 坂田藤十郎 ザビエル シーボルト 十返舎一九 シャクシャイン 杉田玄白 千利休 大黒屋光太夫 高野長英 滝沢馬琴 武田信玄 田沼意次 俵屋宗達 近松門左衛門 千々石ミゲル 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川秀忠 徳川光圀 徳川吉宗 豊臣秀吉 <small>中浦ジュリアン</small> バスコ=ダ=ガマ	長谷川等伯 塙保己一 林羅山 原マルティ 菱川師宣 平賀源内 北条早雲 ポッティチ 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松平定信 間宮林蔵 三井高利 毛利元就 本居宣長 ラクスマン 李舜臣 良寛 <small>ルイス=フロイス</small> ルター レザノフ	浅井忠 阿部正弘 安重根 井伊直弼 板垣退助 伊藤博文 犬養毅 井上馨 岩倉具視 <small>エカチェリーナ2世</small> 江藤新平 袁世凱 大久保利通 大隈重信 大塩平八郎 岡倉天心 尾崎紅葉 和宮 勝海舟 川上音二郎 北里柴三郎 木戸孝允 金玉均 黒田清輝 幸徳秋水 康有為 後藤新平 小村寿太郎 西郷隆盛 坂本竜馬 渋沢栄一 島崎藤村 島津斉彬 島津久光 孫文 高杉晋作 高村光雲 田中正造 田山花袋 津田梅子 坪内逍遙 寺島宗則 徳川家茂 徳川斉昭 徳川慶喜 中江兆民 中岡慎太郎 夏目漱石 ナポレオン 新島襄 野口英世 橋本佐内 ハリス 樋口一葉 ピゴ	フェノロサ 福沢諭吉 二葉亭四迷 ペリー ベルツ 穂積陳重 マルクス 水野忠邦 宮崎滔天 陸奥宗光 明治天皇 森鷗外 山川捨松 山口尚芳 横山大観 与謝野晶子 吉田松陰 リンカン 魯迅 ワシントン	芥川龍之介 ウィルソン 袁世凱 加藤周一 金城重栄 金城重明 ガンジー 小林多喜二 ゴルバチョフ 蒋介石 スターリン 孫文 大工原正泰 田中角栄 田村いくよ 東条英機 原敬 ピカソ ヒトラー 平塚らいてう ブッシュ ホーチミン マッカーサー 三宅仁 ムソリーニ 毛沢東 森住卓 柳宗悦 楊威理 吉田茂 吉野作造 リットン レーニン

取り上げている人物【帝国】

古代	中世	近世		近代		現代	
第2部 古代国家の 成立と東ア ジア	第3部 武家政権の 成長と東ア ジア	第4部 武家政権の展開と世界 の動き		第5部 近代国家の歩 みと国際社会	第6部 二度の世界大 戦と日本	第7部 現在に続く日本と世界	
アテルイ 阿倍仲麻呂 イエス 大伴家持 小野妹子 柿本人麻呂 <small>額田部王女(推古天皇)</small> 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 空海 空也 孔子 光明皇后 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 シャカ 聖徳太子 聖武天皇 菅原道真 清少納言 蘇我馬子 天武天皇 中臣鎌足 <small>中大兄皇子(天智天皇)</small> 卑弥呼 藤原道長 藤原頼通 ムハンマド 紫式部 山上憶良 ワカタケル	浅井長政 足利尊氏 足利義政 足利義満 一遍 今川義元 上杉謙信 運慶 栄西 大友宗麟 快慶 鴨長明 観阿弥 後三条天皇 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 コマシャイン 西行 謝国明 親鸞 世阿弥 雪舟 平清盛 平将門 竹崎季長 武田信玄 チンギス=ハン 道元 日蓮 新田義貞 藤原清衡 藤原定家 藤原純友 藤原秀衡 藤原基衡 フビライ=ハン 北条早雲 北条時宗 北条政子 北条泰時 法然 源義朝 源実朝 源義家 源義経 源義仲 源頼朝 毛利元就 吉田兼好 李成桂	明智光秀 足利義昭 天草四郎 池田光政 石田三成 出雲の阿国 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 上杉治憲 歌川広重 大岡忠相 尾形光琳 織田信長 葛飾北斎 狩野永徳 カルバン 喜多川歌麿 国友一貫斎 小林一茶 コロンブス シーボルト 十返舎一九 渋川春海 シャクシャイン 杉田玄白 関孝和 千利休 高田屋嘉兵衛 滝沢馬琴 武田勝頼 田沼意次 依屋宗達 近松門左衛門 東洲斎写楽 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川吉宗 豊臣秀吉 中江藤樹 <small>バスコ=ダ=ガマ</small> 林羅山 菱川師宣 平賀源内 <small>フランシスコ=ザビエル</small> 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松平定信 三井高利 本居宣長 山田長政 与謝蕪村 李参平	李舜臣 ルター	青木周蔵 井伊直弼 石川啄木 板垣退助 伊藤博文 伊波普猷 井上馨 岩倉具視 インディラ 植木枝盛 上田梯子 内村鑑三 梅屋庄吉 江藤新平 袁世凱 大久保利通 大隈重信 大塩平八郎 岡倉天心 勝海舟 狩野芳崖 河井継之助 川上音二郎 北里柴三郎 木戸孝允 クラーク 黒田清隆 黒田清輝 クロムウェル 幸徳秋水 後藤象二郎 小林虎三郎 小村寿太郎 西郷隆盛 坂本龍馬 三条実美 志賀潔 渋沢栄一 島崎藤村 謝花昇 尚泰 調所広郷 孫文 高杉晋作 高野長英 高橋由一 高村光太郎 滝廉太郎 田中正造 千葉卓三郎 津田梅子 寺島宗則 東郷平八郎 徳川家茂 徳川斉昭	徳川慶喜 豊田左吉 永井繁子 中江兆民 中岡慎太郎 長岡半太郎 夏目漱石 鍋島直正 ナポレオン ネルー 野口英世 萩原守衛 八田與一 原善三郎 原富太郎 樋口一葉 ビスマルク フェノロサ 福沢諭吉 二葉亭四迷 ペリー 正岡子規 間宮林蔵 マルクス 水野忠邦 宮崎滔天 陸奥宗光 村田清風 明治天皇 森鷗外 モンテスキュー 柳宗悦 山川捨松 山口尚芳 横山大観 与謝野晶子 吉田松陰 吉益良子 李鴻章 リンカン ルイ14世 ルソー ロック ワシントン 渡辺華山	芥川龍之介 浅川巧 油屋熊八 <small>アンネ=フランク</small> 池田勇人 犬養毅 ウィルソン 袁世凱 王貞治 大江健三郎 岡本太郎 尾崎行雄 小澤征爾 桂太郎 加藤高明 川端康成 ガンディー 岸信介 北山みね 黒澤明 小泉純一郎 小熊宗克 小谷伊兵衛 近衛文麿 小林一三 小林多喜二 ゴルバチョフ 斎藤隆夫 佐藤栄作 志賀直哉 司馬遼太郎 蒋介石 昭和天皇 白井義男 杉原千畝 スターリン 孫文 大鵬 竹久夢二 田中角栄 谷崎潤一郎 チャーチル チャップリン 知里幸恵 手塚治虫 東条英機 富塚清 長嶋茂雄 新美南吉 新渡戸稲造 浜口雄幸 原敬 樋口季一郎 ヒトラー 平塚らいてう	ブッシュ 古橋廣之進 ベートーベン 細川護熙 マッカーサー 松本清張 美空ひばり 美濃部達吉 宮崎駿 宮沢賢治 ムッソリーニ 村山富市 毛沢東 森脇瑤子 柳田国男 柳宗悦 山田耕筰 湯川秀樹 吉田茂 吉野作造 力道山 リットン レーニン ローズベルト 若乃花(初代)

取り上げている人物【日文】

古代	中世	近世	近代	現代		
第2編 古代までの 日本	第3編 中世の日本	第4編 近世の日本	第5編 近代の日本と世界	第6編 現代の日本と世界		
阿弭流為 イエス 大伴家持 小野妹子 柿本人麻呂 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 空海 孔子 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 持統天皇 シャカ 聖徳太子 聖武天皇 推古天皇 清少納言 蘇我馬子 平清盛 平将門 天武天皇 中臣鎌足 <small>中大兄皇子(天智天皇)</small> 母礼 ハムラビ王 卑弥呼 藤原純友 藤原道長 藤原頼通 源頼朝 <small>ムハンマド(マホメット)</small> 紫式部 山上憶良	足利尊氏 足利義教 足利義政 足利義満 一遍 栄西 鴨長明 観阿弥 兼好法師 後三条天皇 後白河上皇 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 コマシャイン 尚巴志 親鸞 世阿弥 雪舟 平清盛 竹崎季長 重源 チンギス=ハン 陳和卿 道元 日蓮 新田義貞 フビライ=ハン 北条時宗 北条政子 北条泰時 北条義時 法然 源義経 源義仲 源頼朝 源義朝	明智光秀 足利義昭 雨森芳洲 安藤昌益 池田輝政 石田三成 市川団十郎 伊東マンショ 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 <small>歌川(安藤)広重</small> 尾形光琳 阿国 織田信長 葛飾北斎 狩野永徳 喜多川歌麿 小林一茶 コロンブス 坂田藤十郎 十返舎一九 シャクシャイン 杉田玄白 関孝和 千利休 <small>滝沢(曲亭)馬琴</small> 田沼意次 俵屋宗達 近松門左衛門 千々石ミゲル 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川光圀 徳川吉宗 豊臣秀吉 <small>中浦ジュリアン</small> バスコ=ダ=ガマ 原マルチノ 菱川師宣 平賀源内 <small>フランシスコ=ザビエル</small> 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松平定信 ミケランジェロ 宮崎安貞 <small>ムハンマド(マホメット)</small> 本居宣長 与謝蕪村 李参平 李舜臣 ルター	<small>レオナルド=ダ=ビンチ</small> 安重根 井伊直弼 石川啄木 板垣退助 伊藤博文 井上馨 伊能忠敬 岩倉具視 内村鑑三 江藤新平 エンゲルス 袁世凱 大久保利通 大隈重信 大塩平八郎 大森房吉 岡倉天心 荻原守衛 勝海舟 川上音二郎 北里柴三郎 木戸孝允 木村栄 黒田清隆 黒田清輝 クロムウェル 幸徳秋水 小村寿太郎 西郷隆盛 堺利彦 坂本竜馬 三条実美 志賀潔 渋沢栄一 島崎藤村 尚泰 鈴木梅太郎 スチーブソン 孫文 高杉晋作 高野長英 高峰譲吉 田中正造 津田梅子 坪内逍遙 東郷平八郎 徳川慶喜 中江兆民 長岡半太郎 夏目漱石 ナポレオン 野口英世 ハリス 樋口一葉 ピゴ	ビスマルク 平塚らいてう フェノロサ 福沢諭吉 二葉亭四迷 ペリー 前島密 正岡子規 間宮林蔵 マルクス 水野忠邦 陸奥宗光 明治天 森鷗外 山口尚芳 山本作兵衛 与謝野晶子 吉田松陰 リンカーン ワシントン 渡邊華山 ワット	芥川龍之介 アンネ=フランク 池田勇人 石橋湛山 板垣退助 市川房枝 犬養毅 ウィルソン 江戸川乱歩 大隈重信 加藤高明 ガンディー 岸信介 久保山愛吉 小林多喜二 西園寺公望 西光万吉 佐藤栄作 周恩来 蒋介石 昭和天皇 杉原千畝 スターリン 孫文 高梨沙羅 辰野金吾 田中角栄 谷崎潤一郎 チャーチル 手塚治虫 東条英機 豊田佐吉 新渡戸稲造 ネルー 浜口雄幸 原敬 ピカソ ヒトラ 平塚らいてう 平野卓 平野歩夢 溥儀 フランコ 細川護熙 マッカーサー 美濃部達吉 武者小路実篤 ムッソリーニ 毛沢東 柳宗悦 山口仙二 山田孝野次郎 山中伸弥 山端庸介 吉川英治	吉田茂 吉野作造 李承晩 ルーズベルト レーニン 若田光一

取り上げている人物【自由社】

古代		中世	近世		近代		現代			
第1章 古代までの日本		第2章 中世の日本	第3章 近世の日本		第4章 近代の日本と世界() 第5章 近代の日本と世界()		第6章 現代の日本と世界			
相沢忠洋 アテルイ 阿倍仲麻呂 在原業平 イエス <small>大海人皇子(天武天皇)</small> 大友皇子 大伴旅人 大伴家持 小野妹子 小野小町 柿本人麻呂 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 清原元輔 欽明天皇 空海 空也 源信 孔子 好太王 光明皇后 後三条天皇 後白河上皇 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 持統天皇 シャカ 聖徳太子 聖武天皇 白河上皇 秦河勝 神武天皇 推古天皇 菅原孝標の娘 菅原道真 清少納言 蘇我入鹿 蘇我馬子 蘇我蝦夷 醍醐天皇 太宗 平将門 止利仏師 <small>中臣鎌足(藤原鎌足)</small> <small>中大兄皇子(天智天皇)</small> 仁徳天皇 額田王 聖明王 卑弥呼 藤原純友 藤原道綱の母	藤原道長 藤原頼通 源義家 ムハンマド 紫式部 山背大兄王 山上憶良 山部赤人 煬帝 倭の五王 <small>倭王武(雄略天皇)</small>	足利義政 足利義満 安徳天皇 一遍 上杉憲実 運慶 栄西 快慶 鴨長明 後白河天皇 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 親行 親鸞 雪舟 平清盛 重源 チンギス=ハン 道元 日蓮 新田義貞 藤原公清 藤原定家 藤原秀郷 フビライ=ハン 北条時宗 北条泰時 法然 細川勝元 源義朝 源実朝 源義清 源義経 源頼朝 護良親王 山名持豊(宗全) 吉田兼好	会沢正志斎 青木昆陽 明智光秀 麻田剛立 浅野内匠頭 足利義昭 天草四郎時貞 新井白石 イグナチウス・ロヨラ 池大雅 池坊専好 石田梅岩 石田三成 出雲阿国 市川海老蔵 市川団十郎 伊藤仁斎 伊東マンショ 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 岩井半四郎 ヴァリニャーノ 上杉謙信 上杉鷹山 上田秋成 歌川広重 大石内蔵助 大岡忠相 大塩平八郎 緒方洪庵 尾形光琳 荻生徂徠 織田信長 オルガンチーノ 葛飾北斎 加藤清正 狩野永徳 カブラル 喜多川歌麿 吉良上野介 コエリョ ゴッホ 小西行長 小林一茶 コロンプス 坂田藤十郎 佐野川市松 ザビエル ジェローム・ラランド 式亭三馬 志筑忠雄 十返舎一九 シャクシャイン 将軍家宣	杉田玄白 関孝和 千利休 千々石ミゲル 高野長英 高橋至時 高橋景保 高山右近 滝沢馬琴 武田勝頼 武田信玄 田沼意次 依屋宗達 近松門左衛門 沈寿官 鶴屋南北 東洲斎写楽 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川吉宗 豊臣秀次 豊臣秀吉 トルレス 中浦ジュリアン 中江藤樹 二宮尊徳 パスコ・ダ・ガマ 華岡青洲 林子平 林羅山 原マルチノ 菱川師宣 一橋慶喜 平賀源内 フェリペ2世 フォン・シーボルト フランシスコ・ザビエル フロイス 北条早雲 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松倉勝家 松平定信 間宮林蔵 丸山忠邦 宮崎安貞 毛利元就 最上徳内 本居宣長 モネ 山鹿素行	山田長政 与謝蕪村 吉田松陰 ラクスマン 李参平 李勺光 ルター レザノフ 渡辺華山	秋山真之 秋山好古 阿部磯雄 阿部正弘 安重根 アンペール 井伊直弼 イザベラ・バード 石川啄木 板垣退助 伊藤博文 伊藤巳代治 伊波普猷 井上馨 井上毅 岩倉具視 ウィッテ ヴィレム・カッテンディーケ 植木枝盛 江藤新平 エドワード・モース 袁世凱 大久保利通 大隈重信 大森房吉 岡倉天心 尾崎紅葉 片山潜 勝海舟 桂太郎 加藤高明 金子堅太郎 狩野芳崖 川上音二郎 北里柴三郎 木戸孝允 木村栄 金玉均 黒田清隆 黒田清輝 幸徳秋水 孝明天皇 小林虎三郎 小村寿太郎 西郷隆盛 坂本竜馬 三条実美 志賀潔 柴五郎 洪沢栄一 島崎藤村 ジョン・ブラック 鈴木梅太郎	ステッセル <small>セオドア・ルーズベルト</small> 副島種臣 孫文 大木喬任 高杉晋作 高峰讓吉 高村光雲 滝廉太郎 田中正造 千葉卓三郎 津田梅子 東郷平八郎 徳川斉昭 徳川慶喜 内藤魯一 長岡半太郎 夏目漱石 ナポレオン 乃木希典 野口英世 橋本佐内 ハリス 樋口一葉 フェノロサ 福沢諭吉 藤島武二 二葉亭四迷 ペリー 正岡子規 松平容保 陸奥宗光 明治天皇 森鷗外 山形有朋 山口尚芳 横山大観 与謝野晶子 吉田松陰 ラフカディオ・ハーン 李鴻章 ロジェストヴェンスキー	赤崎勇 明人親王 芥川龍之介 阿南惟幾 アベベ 天野浩 池田勇人 石原慎太郎 伊藤博文 犬養毅 ウィルソン 江崎玲於奈 袁世凱 遠藤未希 大江健三郎 大隈重信 大田実 大平正芳 小津安二郎 小淵恵三 カール・マルクス 桂太郎 加藤高明 川端康成 ガンジー 岸信介 黒澤明 黒田清隆 ケネディ ケマル・アタチュルク 小柴昌俊 後藤新平 近衛文麿 小林誠 ゴルバチョフ 西園寺公望 斎藤隆夫 迫水久常 佐藤栄作 志賀直哉 幣原喜重郎 司馬遼太郎 下村修 周恩来 蒋介石 昭和天皇 ジョージ5世 ジョン・マクマリー 白川英樹 杉原千畝 鈴木章 鈴木貫太郎 鈴木善幸 スターリン ゾルゲ	大正天皇 大松監督 高橋是清 <small>タクリット・ブラモード</small> 竹下登 田中角栄 田中耕一 谷崎潤一郎 チャーチル チャスラフスカ チャンドラ・ボース 張学良 張作霖 手塚治虫 東条英機 利根川進 朝永振一郎 トルーマン 中曽根康弘 中村修二 南部陽一郎 ニコライ2世 根岸英一 野依良治 バー・モウ 八田與一 浜山一郎 鳩山雄幸 原敬 ハル バル 樋口季一郎 ヒトラー 平塚らいてう 裕仁親王 溥儀 福井謙一 福田赳夫 フセイン ブッシュ フランクリン・ルーズベルト フルシチョフ 増川敏英 松岡洋右 マッカーサー 松方正義 松本清張 マルクス 三木武夫 三島由紀夫 美空ひばり 三宅義信 宮崎駿 武者小路実篤	ムッソリーニ 毛沢東 山県有朋 山下治広 山中伸弥 山本権兵衛 湯川秀樹 吉田茂 吉野作造 <small>ラジャー・ダト・ノンチ</small> リットン レーガン レーニン 若槻礼次郎

取り上げている人物【育鵬社】

古代	中世	近世	近代	現代				
第1章 原始と古代 の日本	第2章 中世の日本	第3章 近世の日本	第4章 近代の日本と 世界 第5章 二度の世界大 戦と日本	第6章 現代の日本と世界				
相沢忠洋 アテルイ 阿倍仲麻呂 イエス 王仁 大海人皇子 (天武天皇) 大友皇子 大伴家持 太安万侶 小野妹子 柿本人麻呂 鑑真 桓武天皇 紀貫之 行基 空海 空也 國中連公麻呂 鞍作鳥(鳥仏師) 元明天皇 孝謙天皇 孔子 光明皇太后 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 持統天皇 シヤカ 定朝 聖徳太子 聖武天皇 神武天皇 推古天皇 菅原道真 清少納言 蘇我入鹿 蘇我馬子 蘇我蝦夷 道鏡 <small>中臣鎌足(藤原鎌足)</small> 中大兄皇子 (天智天皇) 仁徳天皇 ハドリアナス 稗田阿礼 卑弥呼 藤原道長 藤原頼通 <small>ムハンマド(マホメッド)</small> 紫式部 文武天皇 山背大兄王 山上億良 山部赤人 ワカタケル大王 (雄略天皇) 和氣清麻呂	崇徳上皇 足利尊氏 足利義視 足利義政 足利義満 足利義尚 安徳天皇 一遍 今川義元 上杉謙信 運慶・快慶 栄西 鴨長明 観阿弥 楠木正成 後三条天皇 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 静御前 白河天皇 親鸞 世阿弥 雪舟 平清盛 平将門 武田信玄 チンギス=ハン 道元 日蓮 新田義貞 日野富子 藤原定家 藤原純友 フビライ=ハン 北条氏康 北条時政 北条時宗 北条政子 北条泰時 法然 護良親王 マルコ=ポーロ 源義朝 源範頼 源義経 源義仲 源頼朝 ムハンマド 毛利元就 以仁王 吉田兼好 李成桂 ローマ教皇(法王)	会沢正志斎 青木昆陽 明智光秀 浅野長矩 足利義昭 天草四郎 雨森芳洲 新井白石 安藤昌益 石田梅岩 石田三成 市川團十郎 伊東マンショ 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 上杉鷹山 歌川(安藤)広重 エカテリーナ2世 大石良雄 大岡忠相 太塩平八郎 太田道灌 緒方洪庵 尾形光琳 荻生徂徠 阿国 大江 織田信長 加賀千代 各務支考 春日局 葛飾北斎 加藤清正 狩野永徳 狩野山楽 賀茂真淵 カルバン 喜多川歌麿 吉良義央 国松 光格天皇 <small>高台院(北政所)</small> ゴッホ 小西行長 小林一茶 コペルニクス ゴローウニン コロンプス 近藤重蔵 斎藤利三 坂田藤十郎 シーボルト 十返舎一九 シャクシャイン ジョン万次郎 杉田玄白 鈴木春信 関孝和 セザンヌ 千利休 大黒屋光太夫 高田屋嘉兵衛 高野長英 <small>滝沢(曲亭)馬琴</small> 武田勝頼 伊達正宗 田中久重 田沼意次 玉川清右衛門 近松門左衛門	千々石ミゲル 東洲斎写楽 ドガ 徳川家重 徳川家斉 徳川家治 徳川家光 徳川家康 徳川綱吉 徳川光圀 徳川吉宗 徳富蘇峰 豊臣秀次 豊臣秀吉 豊臣秀頼 中浦ジュリアン 中江藤樹 二宮尊徳 ニュートン 橋本左内 バスコ・ダ・ガマ 支倉常長 塙保己一 林子平 林羅山 原マルチノ 菱川師宣 平賀源内 平田篤胤 福沢諭吉 福島正則 藤田東湖 <small>フランシスコ・ザビエル</small> 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松平定信 間宮林蔵 マルコ・ポーロ 水野忠邦 三井高利 宮崎安貞 最上徳内 本居宣長 モネ 山鹿素行 与謝蕪村 頼山陽 ラクスマン 李参平 李舜臣 良寛 ルター ルノアール レザノフ 渡辺崋山	秋山真之 篤姫 阿部正弘 安重根 井伊直弼 イザベラ・バード 石川啄木 板垣退助 伊藤博文 井上馨 伊能忠敬 岩倉具視 岩崎弥太郎 内村鑑三 江藤新平 榎本武揚 エンゲルス 大久保利通 大隈重信 大村益次郎 大森房吉 大山巖 岡倉天心 緒方洪庵 荻原守衛 和宮 片山潜 勝海舟 桂太郎 金子堅太郎 狩野芳崖 北里柴三郎 木村栄 金玉均 キンドル 久坂玄瑞 國木田独歩 クラーク 黒田清隆 黒田清輝 クロムウェル 幸徳秋水 孝明天皇 後藤象二郎 小村寿太郎 コンドル 西園寺公望 西郷隆盛 西郷従道 坂本竜馬 三条実美 志賀潔 渋沢栄一 島崎藤村 桂太郎 黒田清隆 西園寺公望 西郷従道 松方正義 ピゴ 陸奥宗光 小村寿太郎 原敬 李鴻章 東郷平八郎 乃木希典 孫文 ネルー シュリーマン ジョージ・ワシントン ジョン万次郎	鈴木梅太郎 セオドア・ルーズベルト 高杉晋作 高橋是清 高峰讓吉 高村光雲 滝廉太郎 田中正造 田山花袋 津田梅子 坪内逍遙 徳川昭武 徳川家定 徳川家茂 徳川慶喜 豊田佐吉 中江兆民 中岡慎太郎 長岡半太郎 中條景昭 中村正直 夏目漱石 ナボレオン 新田長次郎 新渡戸稲造 野口英世 パーマー ハーン 橋本佐内 秦佐八郎 八田與一 ハリス 樋口一葉 ピゴ ビスマルク フェノロサ フォンタネージ 福沢諭吉 二葉亭四迷 フルベッキ ヘボン ペリー ベルツ ポアソナード 前島密 正岡子規 松方正義 マルクス 陸奥宗光 明治天皇 モース 森鷗外 モレル 山形有朋 山口尚芳 山内豊信 横山大観 与謝野晶子 吉田松陰 リンカーン ロエスレル ワグネル ワット	アウンサン 赤崎勇 明仁親王 芥川龍之介 阿倍晋三 天野浩 アンネ・フランク 池田勇人 石橋湛山 石原慎太郎 石原裕次郎 市川房枝 伊藤博文 犬養毅 今村昌平 ウィルソン 内村鑑三 宇野 江崎玲於奈 江戸川乱歩 袁世凱 王貞治 大江健三郎 大隈重信 大田実 尾崎行雄 大佛次郎 小津安二郎 オパマ 海部 桂太郎 加藤高明 加藤友三郎 川端康成 ガンジー 岸信介 キッシンジャー 清浦奎吾 クーデンホーフ光子 クレマンソー 黒澤明 黒田清隆 ケネディ 小泉純一郎 香淳皇后 コーデル・ハル 小柴昌俊 後藤新平 近衛文麿 小林多喜二 小林秀雄 小林誠 ゴルバチョフ 西園寺公望 斎藤隆夫 サッチャー 佐藤栄作 志賀直哉 幣原喜重郎 島田叡 島隆 島秀雄 島安次郎 下村修 周恩来 蒋介石 昭和天皇 白川英樹 スカルノ 杉原千畝 鈴木章 鈴木貫太郎	スターリン 孫文 大正天皇 大鵬 高橋是清 竹久夢二 太宰治 田中角栄 田中義一 田中耕一 谷崎潤一郎 チャールル チャンドラ・ボース 張学良 張作霖 寺塚治虫 手塚正毅 トインビー 東条英機 徳富蘇峰 利根川進 朝永振一郎 トルーマン 長嶋茂雄 中曾根 中村修二 南部陽一郎 西田幾多郎 西田高光 新渡戸稲造 根岸英一 ネルー 野依良治 鳩山一郎 浜口雄幸 原敬 樋口季一郎 ヒトラー 平塚らいてう 溥儀 福井謙一 藤田嗣治 藤原てい フセイン ブッシュ <small>フランクリン・ルーズベルト</small> ブルガーニン フルシチョフ 古橋広之進 朴正熙 増川敏英 松岡洋右 マッカーサー 松方正義 マルクス 三島由紀夫 溝口健二 美空ひばり 宮崎駿 武者小路実篤 ムスタファ・ケマル ムソリーニ 棟方志功 明治天皇 毛沢東 安井曾太郎 柳田国男 柳宗悦 山岡荘八 山県有朋 山田耕筈	山中伸弥 山本権兵衛 湯川秀樹 与謝野晶子 吉田茂 吉野作造 <small>ラダ・ビノーバ・パール</small> 力道山 リットン <small>リヒャルト・栄次郎</small> レーガン レーニン <small>ロイド・ジョージ</small> ロケ 若槻礼次郎

取り上げている人物【学び舎】

古代	中世	近世		近代		現代	
第1部 原始・古代	第2部 中世	第3部 近世	第4部 近代	第5部 二つの世界大戦	第6部 現代		
相沢忠洋 アテルイ イエス <small>厩戸皇子(聖徳太子) 大海人皇子(天武天皇)</small> 大友皇子 小野妹子 <small>ガクマ・シツダ・ルカ (アツタ)</small> 鑑真 桓武天皇 紀貫之 空海 クフ王 クレオパトラ 玄奘 孔子 最澄 坂上田村麻呂 始皇帝 持統天皇 シャボリア 定朝 聖武天皇 スルタス 清少納言 蘇我入鹿 蘇我馬子 平貞盛 平将門 <small>中臣鎌足(藤原鎌足)</small> 中大兄尾王子 (天智天皇) 長屋王 卑弥呼 藤原純友 藤原道長 藤原頼通 ブトレマイオス 源経基 ムハンマド 紫式部 モレ 煬帝 <small>ワカタケル大王(武)</small>	足利尊氏 足利義政 足利義満 安徳天皇 一山一寧 一遍 運慶 栄西 上総介広常 <small>鎌倉権五郎景政</small> 亀屋五位女 鴨長明 楠木正成 クビライ=カン 熊谷直実 阿只拔都 <small>後白河天皇(上皇)</small> 後醍醐天皇 後鳥羽上皇 サウマー 朱元璋 <small>白河天皇(上皇)</small> 親鸞 世阿弥 善阿弥 平清盛 平敦盛 <small>高倉天皇(上皇)</small> 崇徳上皇 千葉常胤 重源 チンギス=カン 鳥羽上皇 日蓮 藤原清衡 藤原師通 北条政子 北条泰時 北条義時 法然 布袋屋玄了尼 源義朝 源頼朝 源義仲 湯浅宗親 吉田兼好 李成桂 ローマ教皇	明智光秀 朝倉孝景 足利義昭 雨森芳洲 アンジロー 家光 石田三成 伊能忠敬 井原西鶴 今川義元 上杉謙信 上杉治憲 歌川広重 エカチエリーナ2世 王直 大塩平八郎 大槻玄沢 大友義鎮 尾形光琳 織田信長 葛飾北斎 加藤明成 加藤清正 加藤忠広 狩野永徳 喜多川歌麿 <small>金忠善(沙也可)</small> クルムス 慶念 小林一茶 ザビエル 十返舎一九 シャクシャイン 申維翰 杉田玄白 千利休 大黒屋光太夫 高野長英 滝沢馬琴 武田勝頼 武田信玄 伊達政宗 田沼意次 近松門左衛門 茶屋新六 ツキノエ 綱吉 徳川家康 徳川秀忠 徳川吉宗 豊臣秀吉 バスコ=ダ=ガマ 長谷川等伯 八右衛門 菱川師宣 平賀源内	平田篤胤 福島正則 細川重賢 前野良沢 マゼラン 松尾芭蕉 松雲大師 松平定信 水野忠邦 毛利元就 最上徳内 本居宣長 与謝蕪村 淀屋辰五郎 ラクスマン ラブ=ラブ 李舜臣 ルター レザノフ 渡辺華山	アークライト 井伊直弼 石坂昌孝 板垣退助 伊藤博文 岩倉具視 植木枝盛 内村鑑三 江藤新平 <small>エリザベス=フリーマン</small> エンゲルス 大久保利通 <small>オランダ=ド=グージュ</small> 岸田俊子 木戸孝允 楠瀬喜多 グリム兄弟 黒田清隆 肥塚竜 洪秀全 孝明天皇 <small>コシュート=ラヨシュ</small> 西郷隆盛 坂本竜馬 相楽総三 島津久光 スチーブンソン 孫文 高杉晋作 田代栄助 千葉卓三郎 津田梅子 <small>トゥサン=ルベル チュール</small> 徳川家茂 徳川慶喜 柄内泰吉 中江兆民 <small>ナポレオン=ボナパルト</small> ネルー ハリス ビゴ ピスマルク 深沢権八 福沢諭吉 ペリー ベルツ 松浦武四郎 マルクス 明治天皇 モース 山口尚芳 <small>ラクシュミー=バーイー</small> 林則徐 ルイ16世 ワーグマン	浅田石二 朝日茂 <small>アドルフ=ヒトラー</small> <small>アンネ=フランク</small> 石田雅子 石成基 市川房枝 犬養毅 岩崎弥太郎 ウィルソン 内村鑑三 江口江一 袁世凱 大蔵喜八郎 <small>オードリー=ヘ プバーン</small> 岡倉天心 岡田啓介 桂太郎 加藤義典 ガンジー 北里柴三郎 木下航二 金学順 金城重明 久保山愛吉 黒田清輝 高宗 河野洋平 ココ=シャネル 小林多喜二 小林トミ 小村寿太郎 ザ・ビートルズ 斉藤和子 佐々木禎子 佐藤栄作 島津忠重 ジャジャ王 周恩来 蒋介石 昭和天皇 真栄城玄徳 神武天皇 スターリン 住友吉左衛門 スルタンガリエフ 全琫準 曹仁承 ゾフィー=シヨル 孫文 <small>ダーヒンニエニ=ゲン ダース(北川源太郎)</small> 高橋是清 竹久夢二 武部本一郎 田中角栄	チャスラフスカ チャップリン 辻政信 土家由岐雄 寺内正毅 峠三吉 外山亀太郎 トルーマン 長岡半太郎 中澤啓治 夏目漱石 ニコライ ヌハード ネルー 野口英世 橋本実 林本造 原敬 <small>ハンス=シヨル</small> ピカソ 樋口一葉 ピッチ=ブンヘイン 平塚らいてう 平良啓子 フェノロサ 溥儀 <small>ベニート=ムッ ソリーニ</small> マーチン=ルー ザー=キング 前田利嗣 松岡洋右 マッカーサー マララ=ユサザイ マリ=キュリー マルク=リブー マルタ=クビシヨバ 三井八郎右衛門 陸奥宗光 村山富市 明治天皇 毛沢東 毛利元昭 森鴎外 森田忠信 安田善次郎 柳寛順 山口シツエ 山城博則 山田孝野次郎 山本宣治 横山大観 与謝野晶子 吉田茂 吉野作造 ルーズベルト レイス	レーニン 呂運亨 魯迅 和田英作 張作霖

神奈川県に関連する記載事項

東 書	<p>神奈川浪沖裏 鎌倉時代をえがいた資料 五畿七道 源平の争乱 現在の鎌倉 北条政子 武士の館 定期市の様子 鎌倉時代の新しい仏教 モンゴル帝国の拡大 後醍醐天皇 室町幕府の仕組み 室町時代の海上交通と倭寇 主な戦国大名 信長・秀吉の全国統一 近世の交通 箱根の関所 葛飾北斎の風景画 外国船の出現 ペリーの上陸 ペリーの航路 開港地 日米修好通商条約 開港した横浜港の様子 生麦事件 下関砲台の占領 鉄道の開通 岩倉使節団の航路 交通と産業の発達 綿糸の生産と貿易の変化 関東大震災 空襲などによる死者数 全国の公害 各地の主な史跡</p>
教 出	<p>釣り針 空から見た現在の鎌倉 切り通し 武士の館 後鳥羽上皇の北条氏追討の命令 北条政子の訴え 承久の乱とその後の動き 円覚寺を訪ねて 元使塚 幕府の役人に訴える御家人 後醍醐天皇 室町幕府のしくみ 主な戦国大名 城下町 村に出された「虎の印判状」 北条氏の印判状 葛飾北斎の風景画 信長・秀吉の支配の広がり 主な大名の配置 復元された箱根関所 二宮尊徳 江戸湾に現れた軍艦 日本への外国船の接近 横浜に上陸したペリーの一行 ペリー艦隊の航路 開港後の横浜のにぎわい パリ万博の日本の展示会場 廃藩置県 関東大震災 原水爆反対の署名運動 移り変わる戦後の街を訪ねて 各地の主な遺跡・史跡・できごと</p>
清 水	<p>鎌倉 関東地方の縄文時代の海岸線と貝塚の分布 縄文時代のおもな遺跡 弥生時代のおもな遺跡 モンゴル帝国の拡大 源平の争乱 源頼朝が御家人小山朝政に宛てた下文 承久の乱時の幕府・朝廷の勢力 武士の館 市が開かれたおもな場所 恩賞を要求する 後醍醐天皇 室町幕府のしくみ 15～16世紀の東アジア 室町時代の都市と航路 おもな戦国大名の勢力争い 信長・秀吉の関連地図 おもな大名の配置図 箱根の関所 小田原の渡し 江戸時代の交通 日本にせまる外国 身近な地域を調べよう モリソン号 ペリーの横浜上陸 開港地 新橋駅 岩倉使節団 厚木基地におりたったマッカーサー最高司令官 東日本大震災の被害 日本の歴史的遺産</p>
帝 国	<p>鶴岡八幡宮流鏝馬神事 源平の争乱 北条政子 承久の乱前後の幕府の勢力 円覚寺舍利殿 切り通し 鎌倉のようす 一遍のえがいた絵巻物 鎌倉大仏 モンゴル帝国の領域 室町幕府のしくみ 後醍醐天皇 室町幕府とおもな守護大名 各地のおもな戦国大名 北条早雲 文化が栄えたおもな都市 信長とそのほかの戦国大名の勢力範囲 おもな大名の配置 鳥取藩の参勤交代の道のり 江戸時代の交通 葛飾北斎がえがいた風景画 外国船の来航 ペリーの来航と日米修好通商条約による開港地 生麦事件 幕末の攘夷運動と討幕運動 廃藩置県 世界に開かれた港・横浜 中華街の形成 明治時代の産業と鉄道 大都市を襲った関東大震災 全国の空襲の被害 歴史の舞台を訪ねよう</p>
日 文	<p>国県対照と五畿七道 律令国家における行政区分 今も行われる流鏝馬 鎌倉時代の武士の館 モンゴル帝国とジパング 鎌倉のようす 北条政子 源平の戦い・承久の乱関係地 市のにぎわい 座禅 鎌倉幕府の滅亡と後醍醐天皇の動き 主な戦国大名の分布 文化の広がり 主な大名の配置 にぎわう屋台 おかげ参り 解体された小田原城天守閣 主な外国船の接近 アメリカと結んだ条約との関係地 開国後の1865年の日本の貿易 長州藩の砲台を占領した連合艦隊の兵士 1874年ごろの東京銀座のれん街 鉄道の発達 岩倉使節団の出発 欧米列強との並立をめざして 船の進水式 足尾銅山 関東大震災 一遍上人絵伝 主なできごと・史跡・関係地</p>

自由社	<p>旧国名と都道府県 日宋貿易 空から見た当時の鎌倉 一遍上人絵伝 1400年ごろの世界 北条時宗 後醍醐天皇 東アジアの海上交易のネットワークと倭寇の経路 室町時代の各地の特産品 豊臣秀吉の天下統一地図 江戸初期の主な大名の配置 二宮尊徳と勤勉の精神 江戸時代の交通路と都市および各地の特産品 富嶽三十六景・神奈川沖浪裏 欧米諸国の船が目撃された数 ペリーの2回の来航 日本人が写生した黒船 ペリー提督・横浜上陸の図</p>
育鵬社	<p>富嶽三十六景・神奈川沖浪裏 黒曜石ヒスイの原産地とヒスイの発見されたおもな遺跡 一遍上人絵伝 鎌倉の復元模型 源平の争乱 源頼朝はなぜ鎌倉を選んだか 市のように 北条時宗と伝えられる肖像画 モンゴル帝国の領土 13世紀ごろの世界 後醍醐天皇 室町時代のおもな交通路と各地の特産品 静御前 北条政子 豊臣秀吉の全国統一地図 江戸初期のおもな大名の配置 江戸時代の交通と都市の産物 おもな外国船の接近 二宮尊徳 伊勢参りのようす 咸臨丸 浦賀沖にあらわれた黒船 ペリー神奈川上陸図 ペリーの航路 薩英戦争 下関砲台を占拠した四国連合艦隊の兵士たち 廃藩置県による新しい府県 岩倉使節団632日間の行程 新橋・横浜間の鉄道開通 全国に広がった鉄道路線 「弾丸列車計画」の想定路線図 インターネットを役立てよう 各地のおもな遺跡・史跡</p>
学び舎	<p>約6000年前の日本列島 木簡に書かれた品物 右目を射られた鎌倉権五郎景政 東国の武士団 鎌倉 源平の内乱 海をわたる禅僧たち 鎌倉時代の市と港 都市鎌倉と見世棚 座と各地の特産物 加賀藩大名行列の経路 大名の配置と石高 朝鮮通信使の漢城から江戸までのルート 日本に接近する外国船 日本人が描いたペリーの顔 横浜に上陸するペリー 開港する5港 居留地 横浜港の貿易 4カ国艦隊による下関砲台の占領 生麦事件の現場 4カ国艦隊の下関占領と薩英戦争 廃藩置県後の府県 使節団の中心メンバー 横浜港から九州へ向かう政府軍の兵士 五日市と東京・横浜 農村の子どもの家庭生活 関東大震災 日本にあった主なアメリカ軍基地 福島第一原子力発電所からもれた放射能の広がり 歴史地図</p>

北方領土について取り上げている記載事項

<p>東 書</p>	<p>P168 そこで、政府は1875（明治8）年、ロシアと樺太・千島交換条約を結び、ロシアに樺太の領有を認める一方、千島列島の全てを日本領にすることで、両国の国境を確定しました。（脚注）幕末の1854年にロシアと結んだ日露和親条約では、択捉島までを日本領とし、得撫島から北の千島列島はロシア領とされました。 （地図）「国境の確定」（地図中に「択捉島」の名称と位置も記載） （写真）「北方四島」 1854年の日露和親条約では、択捉島と得撫島との間が日本とロシアとの国境になりました。歯舞群島（A）、色丹島（B）、国後島（C）、択捉島（D）の北方四島はこれ以降一貫して日本の領土です。上の写真は主に昭和時代に入って撮影されたものですが、北方四島では、海産物の加工（ABC）や畜産（D）などが行われていました。</p> <p>P242 北方領土は、ソ連によって不法に占拠されました。 （脚注）歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島の総称です。</p> <p>P250 （脚注）このとき日本は、北方領土について日本固有の領土であると主張しましたが、ソ連が応じなかったため、平和条約を結ぶことができませんでした。</p> <p>P252～253 歴史にアクセス「日本の領土をめぐる問題とその歴史」 日本とロシアは、幕末の1854年に日露和親条約を結び、択捉島以南を日本領、得撫島から北の千島列島をロシア領としました。それ以降、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島から成る北方領土は、一貫して日本によって統治され、1945年の第二次世界大戦の終戦時には約1万7000人の日本人が居住し、漁業などに従事していました。 ところが、1945年8月9日に日ソ中立条約に違反して日本に対して参戦したソ連は、終戦の直後、北方領土に軍隊を上陸させて、9月初めまでに4島を全て不法に占拠し、翌年には一方的にソ連領に編入し、日本人を強制的に退去させました。1956年に日ソ共同宣言が調印された際にも、ソ連が全島の返還に応じなかったため、平和条約を結ぶことができず、現在もソ連を継承したロシア連邦による不法占拠が行われています。日本政府は、日露和親条約を結んだ2月7日を、1981年に「北方領土の日」と定め、引き続きロシア連邦とねばり強く交渉し、返還を求めています。 （写真）「戦前の北方領土」小学校の運動会のような様子（色丹島 1939年ごろ） （地図中に「択捉島」の名称と位置も記載）</p>
<p>教 出</p>	<p>P144 （脚注）ロシアとの条約では、千島列島の択捉島以南を日本領、ウルップ島以北をロシア領としましたが、樺太については国境を決めませんでした。</p> <p>P165 一方、ロシアとは、江戸時代に紛争があった樺太と千島の帰属について、1875年、樺太・千島交換条約を結び、樺太（サハリン）をロシア領、千島列島の全島を日本領と決めました。</p> <p>P244 ソ連とは、北方領土問題が未解決のまま、1956年、日ソ共同宣言に調印して国交を回復しました。国交を回復しました。 （脚注）ソ連が調印を拒否したことから、千島列島の帰属については平和条約で決められませんでした。歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の北方四島は、日本固有の領土であり、日本はこれまでソ連に対して返還を要求してきました。ソ連の解体後は、ロシア連邦と交渉を続けており、これを北方領土問題といいます。</p> <p>P245 （写真）「北海道の東端から見た北方領土」手前は、根室市の納沙布岬です。ここから見える歯舞群島のいちばん近い島までは、4 kmほどしかありません。</p> <p>P257 「現在に残された課題～日本の領土めぐって」 北方領土（北海道） 歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の北方四島は、1855年の日魯通好条約で確認された日本固有の領土です。 1945年にソ連が占領して、その後も不法な占拠を続けたため、日本はソ連（現在は、ロシア連邦）に対して領土の返還を要求して交渉を重ねていますが、返還はいまだに実現していません。 日本は、この問題を解決して平和条約を締結することが必要との考えに立ち、これまでに到達した合意や、法と正義の原則に基づいて、粘り強く交渉を続けています。 （写真）「択捉島」 （地図中に「日本がロシア連邦に返還を求めている北方四島」と記載、「国後島」「択捉島」「色丹島」「歯舞群島」「日本の北端」の名称と位置も記載）</p>

清 水	<p>P178 樺太（サハリン島）は、ロシアとの雑居地、ウルップ島以北の千島はロシア領となっていたが、1875年、樺太・千島交換条約をむすび、樺太をロシア、千島全島を日本のものとした。 （地図）「明治時代の日本と領土の確定」（地図中に「国後島」「択捉島」「色丹島」「歯舞群島」の名称と位置も記載）</p> <p>P255 ソ連とは1956年に日ソ共同宣言を発表し、領土（北方領土）問題を残したまま、国交を回復した。 （脚注）日本は固有の領土である北方四島（国後島・択捉島・色丹島・歯舞群島）の返還をソ連（解体後はロシア連邦）に求め、交渉を続けている。</p>
帝 国	<p>P167 日本の北方の国境については、1875年にロシアと樺太・千島交換条約を結び、樺太島全域をロシア領とするかわりに、占守島以南・得撫島以北の千島列島を日本領としました。</p> <p>P167 （地図）「明治初期の日本の国境と外交」（地図中に「択捉島」の名称と位置も記載）</p> <p>P239 （脚注）日本が降伏したあとの8月18日に、ソ連軍が千島列島の北東端に位置する占守島から攻めこみ、その結果、北方領土までを占領しました。</p> <p>P244 1956年には、鳩山一郎内閣がソ連と日ソ共同宣言を調印し、北方領土問題は未解決のまま、戦争状態の終了を宣言し、国交を回復しました。</p> <p>P245 （地図）「日本の戦後の国境」（地図中に「北方領土（ロシア連邦と係争中）」と記載、「国後島」「択捉島」「色丹島」「歯舞群島」の名称と位置も記載）</p> <p>P246 「日本の領土と近隣諸国～日本の領土画定と領有をめぐる諸課題～」 日本はサンフランシスコ平和条約において、樺太の一部や千島列島の権利を放棄しました。しかし、北方領土の4島はその放棄地にふくまれていません。ソ連は日本がポツダム宣言を受諾したあとに、これらの島々を不法に占拠しました。1956年に日本とソ連の国交が回復したさい、歯舞群島と色丹島は日本に返還することが合意されましたが、択捉島と国後島については意見がくい違い、状況は進展していません。現在、相手はロシア連邦となりましたが、4島の返還と平和条約の締結に向けて、交渉が続いています。 （地図）「北方領土周辺の国境変遷」（1855年、1875年、1905年、1951年）（地図中に「国後島」「択捉島」「色丹島」「歯舞群島」の名称と位置も記載） （写真）「国後島にあった缶づめ工場の作業場（1934年ごろ）」「現在の択捉島のスーパー（2011年）」</p>
日 文	<p>P176 ロシアとは、1875年に日本がウルップ島以北の千島列島を領有する代わりに樺太を譲るといふ、樺太・千島交換条約を結びました。</p> <p>P259 1956年には、鳩山一郎内閣が日ソ共同宣言に調印してソ連との国交が回復し、同じ年に、国際連合にも加盟しました。しかし、北方4島の返還が合意されなかったため、平和条約の締結はできませんでした。 （脚注）日本は北方領土（国後島・択捉島・歯舞群島・色丹島）は日本固有の領土であると主張しましたが、ソ連は応じませんでした。北方領土問題については、現在も、ロシア連邦と交渉を進めています。</p>

自由社	<p>P172 1855年、幕府はロシアと日露和親条約を結び、現在の北方領土の北端、択捉島と得撫島の間を国境と定めた。</p> <p>明治政府は、ロシアとの衝突をさけるために、1875（明治8）年、ロシアと樺太・千島交換条約を結んだ。その内容は、日本が樺太の全土をロシアに譲り、そのかわりに千島列島（クリル諸島）を日本領にするというものだった。</p> <p>（地図）「樺太・千島交換条約（1875年）」 歯舞、色丹、国後、択捉の北方4島は、この交換条約以前から日本領として確定していた。（地図中に「国後島」「択捉島」「色丹島」「歯舞群島」の名称と位置も記載）</p> <p>P248 （コラム）「戦時国際法と戦争犯罪」</p> <p>ソ連は日本の降伏後も侵攻をやめず、日本固有の北方領土の占領を終えたときには、すでに9月になっていました。</p> <p>P252 日本は朝鮮、台湾など、日清戦争後に領有・併合した領土をすべて失った。北方領土はソ連によって不法に占拠された。</p> <p>P258 ソ連は、北方領土の国後・択捉島などを不法占領しているため、日ソ間では平和条約を締結できず、1956（昭和31）年10月に日ソ共同宣言で戦争状態を終結し、国交を回復した。</p> <p>（脚注）北方領土は第二次世界大戦後日本で使われるようになった言葉で、択捉島、国後島、歯舞群島、色丹島の北方4島の範囲を指す。</p>
育鵬社	<p>P172 1854（安政元）年の日露和親条約では、千島列島について、択捉島以南は日本領、それより北はロシア領とされていました…</p> <p>わが国は、イギリスの忠告に従って、1875（明治8）年、ロシアと樺太・千島交換条約を結び、この結果、千島列島は日本領、樺太はロシア領となりました。</p> <p>（地図）「樺太・千島をめぐる国境の画定」（地図中に「国後島」「択捉島」「色丹島」「歯舞群島」の名称と位置も記載、それらを「北方領土（北方四島）」と記載）</p> <p>P173 （コラム）「わが国固有の領土である国境の島々」</p> <p>北方領土：択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、遅くとも19世紀初めには江戸幕府によって完全に治められていて、その状態を確認したのが日露和親条約です。その後も一度も他の国の領土になったことはありませんが、第二次世界大戦終戦後にソ連に侵攻され、今もロシアによって不法に占拠されています。</p> <p>P241 ソ連は8月8日に日ソ中立条約を一方的に破棄して日本に宣戦布告し、満洲や朝鮮、南樺太、千島に侵攻しました。</p> <p>（脚注）ソ連軍は終戦後に択捉島以南に侵攻し、ソ連がロシアになった今日にいたるまで不法占拠している（北方領土問題）。</p> <p>P273 わが国固有の領土である北方領土（北海道）と竹島（島根県）は、それぞれロシアと韓国に不法占拠されたままです。</p>
学び舎	<p>P188 そこで日露両国は1875年、樺太千島交換条約を結んで、千島列島は日本領、樺太はロシア領と決めました。</p> <p>P267 1956年には、日ソ共同宣言によって、北方領土問題は未解決のままソ連と国交を回復し、国連への加盟が認められました。</p> <p>（脚注）北方領土問題</p> <p>日本政府は、北方四島は日本固有の領土であり、その帰属の問題を解決してロシアとの平和条約を結ぶとの基本方針にもとづいて、交渉を行っている。</p>

竹島について取り上げている記載事項

<p>東 書</p>	<p>P168 (地図)「国境の確定」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載) (脚注)東シナ海の尖閣諸島は1895年に沖縄県に、日本海の竹島は1905年に島根県に、それぞれ編入されました。</p> <p>P169 (年表)「明治時代の外交」 1905 竹島の日本領への編入を閣議決定する</p> <p>P251 (脚注)韓国との間には竹島の領有権をめぐる問題がありましたが、日韓基本条約でも解決されませんでした。</p> <p>P252 歴史にアクセス「日本の領土をめぐる問題とその歴史」 竹島では、江戸時代の初めから、幕府の許可を得た鳥取藩の町人が漁業を行い、あしか(海驢)やあわびをとっていました。1900年代に入ってあしか獺が本格化したことを受けて、日本政府は日露戦争中の1905(明治38)年1月に閣議決定を行い、竹島を島根県に編入し、2月22日に知事が告示しました。それ以降、竹島での漁業は島根県の許可制になり、第二次世界大戦によって1941(昭和16)年に中止されるまで続けられました。</p> <p>ところが戦後、韓国は、1952年にサンフランシスコ平和条約が発効する直前、当時の韓国の大統領の名前から「李承晩ライン」と呼ばれる線を公海上に一方的に引き、その韓国側に竹島を取りこんで、領有権を主張しました。日本政府は厳重に抗議しましたが、1954年から韓国は竹島に警備隊を駐留させました。この竹島問題は1965年の日韓基本条約でも解決されず、現在もなお韓国による不法占拠が続いています。島根県は2005(平成17)年に竹島の島根県への編入を告示した2月22日を「竹島の日」と定めるなど、返還を求める運動を続けており、日本政府も外交努力を行っています。</p> <p>(写真)「島根県の告示」 (写真)「明治時代の竹島」1907年ごろに、島根県の写真師が撮影した写真と、その説明文です。 (写真)「あしか獺の様子(1935年)とあしか獺の許可証」 (地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p>
<p>教 出</p>	<p>P165 (地図)「日本の外交と領土の歩み」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載) (年表) 1905 竹島を島根県に編入する (脚注)その後、1895年には尖閣諸島を沖縄県に、1905年には竹島を島根県に、それぞれ閣議決定により編入しました。</p> <p>P257 「現在に残された課題～日本の領土めぐって」 竹島(島根県) 竹島は、日本海に位置する東島や西島などからなる群島で、1905(明治38)年の閣議決定で「竹島」と命名され、島根県に編入された日本固有の領土です。</p> <p>しかし、韓国は、1954(昭和29)年から島に警備隊を常駐させて、不法な占拠を続けています。</p> <p>日本は、これに抗議するとともに、国際司法裁判所での話し合いによる解決を提案してきていますが、実現していません。</p> <p>(写真)「竹島」 (地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p>
<p>清 水</p>	<p>P178 またこののち、日清・日露戦争のころに尖閣諸島や竹島を日本領として編入した。 (脚注)竹島については、江戸時代からその存在が知られていたが、1905年、正式に日本の領土とし、島根県に編入した。 (地図)「明治時代の日本と領土の確定」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p>

<p>帝 国</p>	<p>P167 また1905年には、竹島も現在の島根県に編入されました。 (地図)「明治初期の日本の国境と外交」(地図中に「1905年 島根県に編入」と記載、「竹島」の名称と位置も記載)</p> <p>P245 (地図)「日本の戦後の国境」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p> <p>P247 「日本の領土と近隣諸国～日本の領土画定と領有をめぐる諸課題～」 竹島 17世紀半ば(江戸時代初期)から日本は領有権を確立 竹島では、江戸時代初期には米子の町人たちによって漁業が行われるようになっていました。1905年、明治政府は国際法に従って竹島を島根県に編入し、日本固有の領土と再確認しました。サンフランシスコ平和条約作成段階には、韓国が「日本が放棄する島に竹島を加えてほしい」と願い出ましたが、アメリカも「竹島が朝鮮の領土であったことはない」として拒否しています。しかし1952年、韓国は一方的に境界線を設定し、竹島は韓国領であると宣言して不法に占拠しました。日本は抗議し、国際司法裁判所への共同提訴をよびかけていますが、韓国はこれに応じていません。 (写真)「小谷伊兵衛より差出候竹嶋之絵図」1696年、江戸幕府の求めに応じて鳥取藩から提出された絵図です。当時、竹島は松嶋とよばれ、現在の鬱陵島を竹嶋(磯竹嶋)とよんでいました。 (写真)「隠岐の人たちによる竹島でのあしか狺のようす(1935年)」 (写真)「島根県が発行したあしか狺の許可証」 (地図)「竹島と尖閣諸島の位置」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p>
<p>日 文</p>	<p>P176 (脚注)政府は、国際的な決まりに従って、尖閣諸島を1895年に沖縄県、竹島を1905年に島根県に編入して日本の領土としました。 (地図)「明治初期の外交と国境の画定」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p> <p>P265 (コラム)「韓国・中国との国交正常化と現在の課題」 しかし、この両国と日本のあいだには、解決を求められている大きな問題があります。それは、中国が「尖閣諸島」の領有権を、韓国が「竹島」の領有権を主張しているという問題です。 竹島については、やや事情が異なります。日本政府は1905年に閣議決定を行って、竹島を島根県に編入し、正式に日本の領土としました。その後、1951年に結ばれたサンフランシスコ平和条約では、日本が放棄する領土の範囲に、竹島は含まれていませんでした。韓国は、これに竹島を加えるよう要望しましたが、アメリカはこれをしりぞけました。しかし、その後、韓国の李承晩大統領は「海洋主権宣言」を行って、水産物などに対して自国の主権を行使する範囲を示したいいわゆる「李承晩ライン」を公海上に設定し、そのライン内に竹島を取りこみました。そして、1954年には警備隊を竹島に常駐させるとともに、宿舎や監視所、灯台、接岸施設などを設置しました。日本政府は、韓国のこのような一方的な行為にくり返し抗議を行いましたが、この問題の平和的手段による解決を図るため、同年、竹島の領有権問題を国際司法裁判所にかけることを韓国側に提案しました。しかし、韓国はこの提案を拒否し、現在にいたっています。 (地図)「占領地の日本復帰と近隣諸国との関係」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p>
<p>自由社</p>	<p>P272 (脚注)竹島は江戸時代には鳥取藩の人が幕府の許可を得て漁業を行っていた。1905(明治38)年、国際法に従ってわが国の領土として島根県に編入し以降実効支配を行っていた。</p> <p>P273 竹島は日本固有の領土であるが、韓国は竹島を自国領と主張し、1953年から、武装警察官を常駐させて不当な占拠をつづけている。</p>
<p>育鵬社</p>	<p>P173 (コラム)「わが国固有の領土である国境の島々」 竹島：竹島は、遅くとも17世紀半ばにはわが国の領有権が確立していたと考えられます。わが国は1905(明治38)年に閣議決定によって島根県に編入し、領土にしましたが、第二次世界大戦後、韓国によって不法に占拠され、今もその状態が続いています。 (地図)「近隣諸国との国境画定」(地図中に「竹島」の名称と位置も記載)</p> <p>P273 わが国固有の領土である北方領土(北海道)と竹島(島根県)は、それぞれロシアと韓国に不法占拠されたままです。</p>
<p>学び舎</p>	<p>P199 (脚注)竹島の領有 日本政府は、1905年1月、竹島を日本の領土(島根県)として編入することを、閣議で決定した。</p>

尖閣諸島について取り上げている記載事項

<p>東 書</p>	<p>P168 (地図)「国境の確定」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載) (脚注)東シナ海の尖閣諸島は1895年に沖縄県に、日本海の竹島は1905年に島根県に、それぞれ編入されました。 P169 (年表)「明治時代の外交」 1895 尖閣諸島の日本領への編入を閣議決定する P252～253 歴史にアクセス「日本の領土をめぐる問題とその歴史」 尖閣諸島は、日清戦争中の1895年、日本政府の閣議決定によって日本の領土に編入されました。それまで10年近く、日本政府は何度も現地調査を行い、尖閣諸島が無人島であるだけでなく、清の支配がおよんでいないことを確認してきました。その後、尖閣諸島には、日本の民間人が移住してかつお節の製造や羽毛の採取などの仕事を行い、一時は200人以上の住民が暮らしていました。 第二次世界大戦後の尖閣諸島は、サンフランシスコ平和条約で日本が領有権を放棄した台湾や澎湖諸島にはふくまれず、沖縄の一部としてアメリカの統治の下に置かれ、1972年の沖縄返還にともなって日本に復帰しました。 ところが、尖閣諸島の周辺に石油や天然ガスが埋蔵されている可能性が確認されると、1970年代に入って中国や台湾が領有権を主張し始めました。しかし、現在も尖閣諸島は日本が実効支配し、広く国際社会から日本の領土として認められています。 (写真)「かつお節の製造」尖閣諸島の魚釣島では、近海のかつおを使ったかつお節が製造されていました。(明治30年代) (地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p>
<p>教 出</p>	<p>P165 (地図)「日本の外交と領土の歩み」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載) (年表) 1895 尖閣諸島を沖縄県に編入する (脚注)その後、1895年には尖閣諸島を沖縄県に、1905年には竹島を島根県に、それぞれ閣議決定により編入しました。 P257 「現在に残された課題～日本の領土めぐって」 尖閣諸島(沖縄県) 尖閣諸島は、南西諸島西端に位置する魚釣島、北小島、南小島などから成る島々の総称で、1895年の閣議決定で沖縄県に編入された日本固有の領土です。 しかし、1970年代から、中国が自国の領土であると主張し始めました。その後、中国船が領海に侵入するなどの事件が起こっていることから、日本は中国に抗議し、警戒や取り締まりを強めています。 日本は、尖閣諸島をめぐる、解決すべき領有権の問題は存在していないとの立場をとっています。 (写真)「尖閣諸島」 (地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p>
<p>清 水</p>	<p>P178 またこののち、日清・日露戦争のころに尖閣諸島や竹島を日本領として編入した。 (脚注)尖閣諸島については1885年ころから沖縄県を通して調査をおこない、どの国の支配もおよんでいない土地であることを確認して、1895年に日本の領土とした。 (地図)「明治時代の日本と領土の確定」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p>

<p>帝 国</p>	<p>P167 (地図)「明治初期の日本の国境と外交」(地図中に「1895年 尖閣諸島を沖縄県に編入」と記載、「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p> <p>P168 1895年には尖閣諸島も沖縄県に編入しました。</p> <p>P245 (地図)「日本の戦後の国境」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p> <p>P247 「日本の領土と近隣諸国～日本の領土画定と領有をめぐる諸課題～」 尖閣諸島 1895年1月 閣議決定で日本の領土となる</p> <p>尖閣諸島は、日本政府が1885～95年に慎重に調査し、どこの国の領土でもないことを確認したうえで、日本の領土に編入しました。第二次世界大戦後はアメリカ軍の占領下におかれましたが、1972年には沖縄県の一部として日本に復帰しました。1968年には国際連合による海洋調査が行われ、海底に石油などの資源があることがわかっています。1971年から中国が領有権を主張するようになってきましたが、尖閣諸島は日本固有の領土であり、それは日本政府だけの主張ではなく国際的にも認められています。</p> <p>(写真)「かつお節を干す風景(明治30年代)」魚釣島では、戦前まで日本人が住んでおり、かつお節の工場がありました。</p> <p>(地図)「竹島と尖閣諸島の位置」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p>
<p>日 文</p>	<p>P176 (脚注)政府は、国際的な決まりに従って、尖閣諸島を1895年に沖縄県、竹島を1905年に島根県に編入して日本の領土としました。</p> <p>(地図)「明治初期の外交と国境の画定」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p> <p>P265 (コラム)「韓国・中国との国交正常化と現在の課題」</p> <p>しかし、この両国と日本のあいだには、解決を求められている大きな問題があります。それは、中国が「尖閣諸島」の領有権を、韓国が「竹島」の領有権を主張しているという問題です。</p> <p>尖閣諸島は、1895(明治18)年から日本政府が再三にわたって現地調査を行い、単に尖閣諸島が無人島であるだけでなく、清国の支配がおよんでいる痕跡がないことを慎重に確認しました。そして、1895年に閣議決定を行って、尖閣諸島を沖縄県に編入し、正式に日本の領土としました。これに対し、1970年代に入ってから中国政府および台湾当局が尖閣諸島の領有権を主張し始めましたが、尖閣諸島は、現在日本の領土として管理されています。歴史的経緯からも、尖閣諸島をめぐる領土問題は存在しないというのが、日本政府の立場です。</p> <p>(地図)「占領地の日本復帰と近隣諸国との関係」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p>
<p>自由社</p>	<p>P272 また、尖閣諸島の領有権を主張し、頻繁に漁船、公船、航空機を日本の領海・領空に侵入させているが、日本は「尖閣は日本固有の領土であり、領土問題は存在しない」との立場をとっている。</p> <p>(脚注)尖閣諸島は1885年からの調査に基づき、1895年日本政府がどの国にも属していないことを確認し、閣議決定して日本領土に編入した。そして最盛期には200人以上の日本人がカツオ節製造などのために居住していた。戦後アメリカの施政下にあったが、1972年沖縄返還にともない、日本に戻った。</p> <p>(地図)「中国による民族弾圧と周辺地域との紛争」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p>
<p>育鵬社</p>	<p>P173 (コラム)「わが国固有の領土である国境の島々」</p> <p>尖閣諸島：尖閣諸島は1884(明治17)年から日本人が開拓していました。わが国は慎重に調査したうえで、1895(明治28)年に閣議決定によって沖縄県に編入し、領土にしました。今にいたるまで完全に治めていますが、中国や台湾当局が近年になって領有を主張しています。</p> <p>(地図)「近隣諸国との国境画定」(地図中に「尖閣諸島」の名称と位置も記載)</p> <p>P273 わが国が統治している尖閣諸島(沖縄県)の周辺海域には中国の監視船が侵入するなど、領土が脅かされています。</p>
<p>学び舎</p>	<p>P195 (脚注)尖閣諸島の領有 日本政府は、1895年1月、尖閣諸島を日本の領土(沖縄県)として編入することを、閣議で決定した。</p>

慰安婦または従軍慰安婦について取り上げている記載事項

<p>学び舎</p>	<p>P281 (脚注)「河野洋平官房長官談話(1993年)」(一部要約)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査の結果、長期に、広い地域に、慰安所が設けられ、数多くの慰安婦が存在したことが認められる。 ・朝鮮半島からの慰安婦の募集、移送などは、総じて本人たちの意思に反して行われた。 ・軍の関与の下で、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた。政府は、苦痛を受け、心身に癒やすことのできない傷を負ったすべてのの方々に対し、心からお詫びと反省の気持ちを申し上げる。 ・歴史の真実を直視し、歴史研究・歴史教育を通じてこの問題を記憶にとどめ、過ちをくり返さない決意を表明する。 <p>現在、日本政府は「慰安婦」問題について「軍や官憲によるいわゆる強制連行を直接示すような資料は発見されていない」との見解を表明している。</p>
<p>その他7社については該当する記載事項なし</p>	

強制連行について取り上げている記載事項、

拉致について取り上げている記載事項

	強制連行について取り上げている記載事項	拉致について取り上げている記載事項
<p>東 書</p>	<p>P227 日本は、植民地や占領地でも、厳しい動員を行いました。 多数の朝鮮人や中国人が、意思に反して日本に連れてこられ、鉱山や工場などで劣悪な条件下で労働を強いられました。こうした動員は女性にもおよび、戦地で働かされた人もいました。戦争末期には徴兵制が朝鮮や台湾でも導入されました。</p>	<p>P260 核兵器の開発を進めるとともに、人権や主権を無視して多数の日本人を拉致したことが明らかになった北朝鮮との関係は、難しい問題です。 (写真)「拉致問題」被害者のうち5人が2002年に、その家族が2004年に北朝鮮から帰国しましたが、依然として問題は解決されておらず、国交正常化の動きも進んでいません。(東京都 2002年10月15日)</p>
<p>教 出</p>	<p>P227 戦争が総力戦となるなか、日本国内ばかりでなく、植民地や占領地の人々も、労働力や兵力として動員されるようになりました。労働力の不足を補うために、多くの朝鮮人や中国人が日本の鉱山や工場に連れてこられ、低い賃金で厳しい労働を強いられました。また戦争末期になると、朝鮮や台湾では、志願兵制度が改められて徴兵制がしかれ、植民地の人々も「日本軍兵士」として戦場に送られました。多くの朝鮮人女性なども、工場に送り出されました</p>	<p>P256 「隣国と向き合うために」 会談で、北朝鮮側は日本人拉致の事実を認めて謝罪し、まもなく一部の拉致被害者の帰国が実現しました。しかし、いまだに行方わからない被害者も多くいるため、日本政府は、その消息と帰国を求める交渉を続けています。 (写真)「北朝鮮から帰国した拉致被害者(2002年)」</p>
<p>清 水</p>	<p>P241 また、むりやり連れてきた朝鮮人・中国人や連合軍の捕虜も炭鉱などで働かせた。</p>	<p>P265 (脚注)1991年に両国による国交正常化のための交渉がはじめられたが、中断した。2002年9月、はじめて日本の首相が訪朝して日朝首脳会談がおこなわれ、交渉が再開されたが、北朝鮮による日本人の拉致(むりやり連れ去ること)事件が解決されていないことや、北朝鮮の核問題もあって交渉は進んでいない(2014年3月現在)。</p>

帝 国	<p>P227 戦局が悪化すると、朝鮮・台湾の人々へも徴兵を実施しました。</p> <p>戦争によって日本国内の労働力が不足すると、日本は企業などで半ば強引に割りあてを決めて朝鮮人や中国人を集め、日本各地の炭坑・鉱山などに連れて行き、低い賃金で厳しい仕事に就かせました。</p>	<p>P259 韓国と北朝鮮はいまだ分断されており、北朝鮮による日本人の拉致問題も未解決のままです。</p> <p>(写真)「拉致被害者の帰国」北朝鮮によって日本から拉致された被害者のうち5名が、2002年、24年ぶりに帰国しました。そのほかの被害者のさらなる情報開示・帰国が求められています。</p>
日 文	<p>P234 また朝鮮や中国の占領地から数十万といわれる人々が動員され、炭鉱や工場などのきびしい労働条件の職場で働かされました。戦争の末期には、朝鮮や台湾でも徴兵制が実施されました。</p>	<p>P264 (脚注)2002年に初の首脳会談が行われ、国交正常化交渉の再開を含む日朝平壤宣言が発表されました。この会談のなかで、北朝鮮側が日本人を拉致していたことを認めました。</p> <p>P270 (写真)「北朝鮮から帰国した拉致被害者(2002年)」消息が明らかでない拉致被害者も多く、一刻も早い解決が求められています。</p>
自由社	<p>P243 戦争末期には朝鮮・台湾の人々にも徴兵や徴用が適用され、また日本の鉱山などで過酷な条件で働かされ多くの犠牲が出た。</p>	<p>P272 北朝鮮は1970年代から日本人を拉致し、自国の体制強化のために利用した。日本は3度にわたり拉致被害者と家族の一部を帰国させたが、依然として数百名ともいわれる日本人同胞が不当に拘束されている。</p> <p>(写真)「北朝鮮に拉致された人たちの帰国(2002年10月15日)」わが国の国民保護の体制の不備について拉致された被害者も多い。</p>
育鵬社	<p>P238 戦争の末期には、朝鮮や台湾にも徴兵や徴用が適用され、人々に苦しみを強いることになりました。日本の鉱山や工場などに徴用され、きびしい労働を強いられる朝鮮人や中国人もいました。</p>	<p>P273 北朝鮮の工作人員に多くの日本人が連れ去られた事件(拉致事件)も解決されていません。</p> <p>(写真)「北朝鮮に拉致されて帰国した人たち(2002.10.15)」2002年(平成14)年9月、訪朝した小泉純一郎首相に対し、北朝鮮は日本人を拉致した事実を認めた。その後拉致被害者の一部は帰国したものの、今なお拉致された多数の日本人の消息が不明であり、問題は解決していない。</p>
学び舎	<p>P253 一方、日本にいた朝鮮人は、帰国しようと、いっせいに博多(福岡県)や下関(山口県)などの港につめかけました。植民地支配によって生活が苦しくなり、朝鮮から日本に渡ってきた人たちや、炭鉱などに強制連行されてきたりした人たちです。しかし、日本側の手配は進まず、港は人びとであふれました。</p>	<p>該当する記載事項なし</p>

	エネルギー問題について取り上げている記事事項	震災について取り上げている記事事項
東 書	<p>P255 この石油危機(オイル・ショック)によって、先進工業国の経済は不況になり、日本でも高度経済成長が終わりました。</p> <p>しかし、日本は、経営の合理化や省エネルギー化を進め、いち早く不況を乗りきりました。</p> <p>P262 深刻な被害をもたらした 1995(平成7)年の阪神・淡路大震災や 2011年の東日本大震災は、私たちに防災やエネルギー面での課題に気づかせる一方で、地域の絆とボランティア活動の重要性を明らかにしました。</p> <p>P272 深めよう「人類の歴史とエネルギー」</p>	<p>P211 歴史にアクセス「関東大震災」</p> <p>P262 深刻な被害をもたらした1995(平成7)年の阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災は、私たちに防災やエネルギー面での課題に気付かせる一方で、地域の絆とボランティア活動の重要性を明らかにしました。</p> <p>(写真)「阪神・淡路大震災」</p> <p>P270 深めよう「歴史の中の大震災」</p>
教 出	<p>P251 1973年にアラブ諸国がとった石油戦略は、日本にも大きな打撃を与えました(石油危機)。</p> <p>P259 歴史の窓「東日本大震災」</p>	<p>P209 歴史の窓「関東大震災」</p> <p>P230 人物から歴史を探ろう「大戦期に生きた人々」</p> <p>P259 1995年1月、兵庫県南部を中心に発生した大地震は、死者6400人をこえる大きな被害をもたらしました(阪神・淡路大震災)。</p> <p>2011年3月に起こった東日本大震災は、戦後最大の被害をもたらし、人々の生活に深刻な影響を及ぼしています。</p> <p>(写真)「津波によって建物の上に乗上げたバス(宮城県石巻市)と、被災者の救援活動を行う自衛隊(岩手県宮古市)」</p> <p>P259 歴史の窓「東日本大震災」</p>
清 水	<p>P261 日本経済は1973年の第4次中東戦争による原油価格の値上がり(石油危機)で大きな打撃を受けた。</p> <p>企業は経営を徹底的に合理化して生産費を安くし、省エネルギー化を進めた。</p>	<p>巻頭 (コラム)「私たちの住む日本列島」</p> <p>P219 1923年9月1日、はげしい地震が関東地方をおそった。東京・横浜を中心に各地で火災も発生し、死者・行方不明者は10万人以上にも達した。この関東大震災によって民衆の生活は混乱し、経済も大きな打撃を受けた。</p> <p>P220 (写真)「関東大震災のときの自警団」</p> <p>P270 2011年3月に東日本大震災が発生し、地震と津波で多大な人命が失われた。</p> <p>P270 (写真)「東日本大震災」</p> <p>P270 (地図)「東日本大震災の被害」</p>

<p>帝 国</p>	<p>P251 石油をおもなエネルギー源としていた日本などの先進国は、大きな打撃を受けました(石油危機)。 1979年と合わせ、2度にわたった石油危機を、日本は省エネルギー技術の開発などによってのりきり、「経済大国化」が進みました。また、石油危機以降には、原子力発電など、石油以外のエネルギー資源の開発が進められるようになりました。</p> <p>P251 (コラム)「石炭から石油への大転換」 P260 福島県の原子力発電所の事故をきっかけにエネルギー確保の方法があらためて議論され、太陽光や地熱など、再生可能エネルギーがより注目されるようになりました。同時に、エネルギーを大量に使う社会のあり方も議論されるようになりました。 (コラム)「環境問題や災害に生かす知恵と技術」</p>	<p>P210 1923(大正12)年の関東大震災後は、地震に強い鉄筋コンクリートでできた公共の建築物が増えました。</p> <p>P211 地域史「大都市を襲った関東大震災」 P260 2011年3月11日、東北地方の太平洋沖を震源とする、日本の観測史上最大の地震が起こりました。地震のあと、東北地方を中心に津波が襲い、死者・行方不明者は合わせて1万8千人以上という大きな被害が出ました。多くの人が家を失い、街全体に大きな被害を受けた地域もありました(東日本大震災)。 (写真)「被災地の清掃を手伝う海外ボランティア」「神戸の人たちが東日本大震災の被災地へ贈った言葉」</p>
<p>日 文</p>	<p>P268 1973(昭和48)年の石油危機によって世界の経済は大きな打撃を受け、日本の高度経済成長も終わりました。しかし、日本は、輸出の拡大や公共投資の増大、企業の合理化・省エネルギー化などによってこの不況を乗り切り、1980年代には、日本は世界のなかの経済大国、先進国となりました。</p> <p>P269 (写真)「廃炉作業が進められる福島第一原子力発電所と民家(2014年2月)」原発事故の影響で、事故から4年たった2015年3月現在でも、福島県大熊町のすべての町民が、町外で避難生活を送っています。</p>	<p>P218 東京の下町は、1923(大正12)年9月の関東大震災によって、大きな被害を受けました。</p> <p>P219 (コラム)「関東大震災」 P269 1995年1月17日に、死者6434人、負傷者4万3792人、家屋の全半壊25万棟という、阪神・淡路大震災が起きました。さらに、2011年3月11日には東日本大震災が発生し、地震と津波により、死者行方不明者2万1613人、家屋の全半壊は40万101戸(2014年3月1日現在)、直接的な被害額16兆から25兆円という未曾有の被害をもたらしました。</p> <p>P269 (写真)「東日本大震災前後の高田松原」 P270 (写真)「東日本大震災時に自衛隊員とともに炊き出しを手伝う中学生ボランティア」 P271 1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東日本大震災では、被災者の支援と復興に多くのボランティアが活躍しました。 P274 先人に学ぶ「災害の歴史に学び、私たちの未来に活かす」</p>

<p>自由社</p>	<p>P265 この地域の石油に主要なエネルギーを依存する日本経済は、1973(昭和48)年と1979(昭和54)年の2度にわたり深刻な打撃を受けた(石油危機)。 しかし、これによって、電気製品の消費電力を大きく減らすなどの省エネルギー技術が発達し、日本経済はかえって強くなった。 (コラム)「石油危機」</p>	<p>P221 1923(大正12)年9月1日、関東地方で大地震がおこった。東京や横浜など各地で発生した火災で民家、重要な建造物、文化施設など多数が焼失し、死者・行方不明者は10万人をこえた(関東大震災)。 (写真)「都心の被災状況」 P273 2011(平成23)年3月11日、東日本を襲ったマグニチュード9.0の大地震による巨大な津波に東北・関東地方の太平洋沿岸のみこまれ、約2万人が亡くなった。 P273 (写真)「東日本大震災」 P276 外の目から見た日本「東日本大震災と日本人」</p>
<p>育鵬社</p>	<p>P264 1973(昭和48)年、中東戦争の影響を受け、原油価格が大幅に上がるという石油危機(オイル・ショック)が日本を襲い、物価が上がったり、トイレットペーパーなどの品物が一時的に不足したりしました。 以後、わが国は省エネルギー技術の開発に力を注ぎました。 P272 津波などによっておきた福島県の原子力発電所の事故のために、多くの周辺住民が避難生活を送らなければならなくなり、これからのわが国のエネルギー政策をどうすべきかが議論されています。</p>	<p>P219 1923(大正12)年9月1日、関東地方で発生した大地震は東京・横浜という人口密集地を直撃しました(関東大震災)。この地震は死者・行方不明者10万数千人、焼失家屋約45万戸という大被害をもたらしました。 P219 (写真)「関東大震災」 P272 1995(平成7)年の阪神・淡路大震災に続き、2011(平成23)年には東日本大震災がおこりました。三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震によって東北や関東の太平洋岸を大津波が襲い、死者・行方不明者は2万人近くに達しました。 P272 (写真)「東日本大震災」</p>
<p>学び舎</p>	<p>P269 日本では、1963年に実験用の原子炉で初めて発電が行われ、「鉄腕アトム」のテレビ放映が始まりました。家庭の電化がすすみ、電力消費量が増えました。1970年、運転を開始した敦賀原子力発電所(福井県)からの電気で、大阪万国博覧会の開会式の灯りがともされました。 P273 エネルギー源は石炭から石油に代わりました。 P273 環境基準が設定されると、原油や排ガスから硫黄分を除く技術や、燃料消費が少ない自動車エンジンの開発などもすすみました。 (コラム)「まき割りからの解放」 P279 このため、それまで安い原油によって支えられてきた世界経済は、大きな打撃を受け、深刻な不景気となりました(石油危機)。これによって、日本の高度経済成長は終わりました。 アメリカや日本などの資本主義国は、エネルギー消費を減らし、企業経営を合理化するなどして、不景気から回復しました。</p>	<p>P217 (コラム)「関東大震災 - いわれなく殺された人びと」 P286 2011(平成23)年3月11日、午後2時46分。三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生しました。東日本を中心に強いゆれが記録され、その後も各地で多くの余震が続きました。この地震に続いて、太平洋岸の広い範囲に、巨大津波が押し寄せました。岩手県宮古市では、最大津波・高さ40.4mを観測しました。この震災による死者は1万5889人、行方不明者は2597人にものぼりました(2014年11月現在)。 P286 (写真)「津波で、船や家屋が押し流された気仙沼の市街地(2011年3月12日)」 P312 (写真)「阪神淡路大震災」 P312 (写真)「東日本大震災/津波が到達した時刻で止まった学校の時計(岩手県立高田高校)」</p>

4 構成・分量・装丁

		調査研究事項	東書	教出	清水	帝国	日文	自由社	育鵬舎	学び舎
構成・分量・装丁	1	古代までの日本（割合：％）	17	15	19	14	17	22	20	16
		中世（％）	13	13	12	13	14	11	12	11
		近世（％）	17	17	21	19	19	17	21	20
		近代（％）	38	41	38	37	37	39	37	39
		現代（％）	14	13	10	16	14	11	10	13
	2	地図（分布図含む）の数	76	84	92	114	126	71	95	119
	3	グラフの数	28	38	25	39	58	12	33	23
	4	文献資料の数	70	44	40	56	48	36	40	136
	5	読み物資料の数	29	24	16	56	26	35	56	97
	6	略年表の数	24	22	19	22	42	14	28	25
	7	写真や絵の数	1055	719	698	867	855	528	828	768
	8	図・表の数	57	52	54	52	69	67	56	28
	9	巻末の学習資料の数	4	4	4	3	8	3	3	3
10	索引の項目数	1400	1176	1253	1058	1188	1161	1301	1473	
11	判型	A B	A B	B 5	A B	A B	B 5	A B	A 4	
12	総ページ数	287	274	287	268	295	288	290	323	
	平成27年度版総ページ数	263	268	287	266	279	276	262	-	
	増減（％）	+9%	+2%	+0%	+1%	+6%	+4%	+11%	-	

5 表記・表現

調査研究項目	東書	教出	清水	帝国	日文	自由社	育鵬社	学び舎
文章表現や漢字・かなづかい・用語・記号・計量単位・図版などの使用	適	適	適	適	適	適	適	適
文字の大きさ・字間・行間・書体など	適	適	適	適	適	適	適	適
文章・図版などの割付け	適	適	適	適	適	適	適	適